

俳句雜誌

令和六年十一月十五日発行（毎月一日発行）通巻第九十七卷第十一号

# 水 月

2024 11月・12月 合併号



《今月のかな女》

繙帯とれば冬日に足のかたちかな

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

本句は大正九年の作であるが、かな女の年譜には、前年の大正八年に足首を捻挫したことが記されており、以後一年程その箇所には繙帯が巻かれていたと思われる。怪我の原因は、大正五年に初来日して、その後も来日を繰り返して複葉機の曲芸飛行を日本各地で披露していた米人飛行士アート・スミスの宙返りを自宅の庭で見物していたの事故であった。冬日の当たる縁側で、久し振りに自分の左足と対面した時のかな女の感激の一句である。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

水明競詠

再会を約す霧笛の「移情閣」

大橋迪代

季音雪

月代の石段見ゆる連子窓

菊池ひろこ

季音月

黍あらし島津突破の関ヶ原

近藤徹平

季音花

お局を偲び小江戸を秋日傘

曲淵徹雄

水明集

桐一葉はらりと落ちて嘘をつく

篠崎紀子

鼓笛集

マドンナに遇ひてときめく秋祭

反町 修

山紫集

街に来て道にまよふ子翳雲

池田雅夫

# 水明

令和6年  
11・12月号

今月のかな女

今月の巻頭句

りんどう峠 (作品)

山本鬼之介

4

城の秋 (近詠)

大橋廸代

6

秋そぞろ (近詠)

星野和葉

7

百尺竿頭 ✳️ 主宰作品の鑑賞

五明昇

8

ゆずり葉 ✳️ 季音月評

檜鼻ことは

10

季音「雪」 (同人作品)

|       |    |
|-------|----|
| 菊池ひろこ | 五明 |
| 境延昭   | ほか |

12

季音「月」 (同人作品)

|      |      |
|------|------|
| 近藤徹平 | 梅澤佐江 |
| 大場順子 | ほか   |

18

季音「花」 (同人作品)

|      |       |
|------|-------|
| 曲淵徹雄 | 河野はるみ |
| 野田静香 | ほか    |

23

現代俳句鑑賞

網野月を

28

『水明誌』を繙く

長井寛

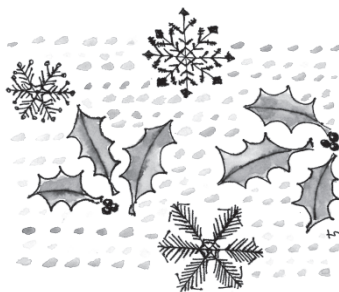
30

想い出の夏そして惜別

山本鬼之介

31





|    |          |      |    |
|----|----------|------|----|
| 集子 | 自選五十句    | 田寺玲子 | 33 |
| 特玲 | 王道あ・うん   | 大橋廸代 | 36 |
| 家寺 | 達磨夕日は海峡に | 森本早苗 | 38 |
| 作田 | 田寺玲子の一句  |      | 40 |

|      |      |      |    |
|------|------|------|----|
| 水明競詠 | 大橋廸代 | 菅原卓郎 | 44 |
|      | 大場順子 |      | 40 |

|     |      |      |    |
|-----|------|------|----|
| 水明集 | 篠崎紀子 | 菅原卓郎 | 61 |
|     | 霜多光代 | ほか   |    |

|             |       |     |
|-------------|-------|-----|
| 作品鑑賞        | 山本鬼之介 | 72  |
| 水琴窟         | 池田雅夫  | 76  |
| 俳誌望見        | 染谷風子  | 60  |
| 鼓笛集         | 菅原卓郎  | 81  |
| 句集喝采        |       | 82  |
| 山紫集         | 青木鶴城  | 88  |
| りんどう忌の記     |       | 90  |
| 水明例会報・各地句会報 |       | 93  |
| 新珠賞作品募集     |       | 102 |
| 全国大会のお知らせ   |       | 103 |
| 風声・発展基金御礼   |       | 104 |
| 後記          |       | 105 |

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

---

---

りんどう峠

山本鬼之介

「君が代」に千の字二つ 秋日燦

月白や蹶起の森が動き出す

秋の蚊よ目減りしてゐる隠し酒

---

野 佛 を 蹴 倒 す ほ ど に 黍 嵐  
彼の 歌 が 弾 む 峠 の 濃 龍 膽  
風 鐸 を 鳴 ら し に 山 を 秋 の 風  
金 秋 や 慶 事 に 叶 ふ 青 暈  
る の し し 担 ぎ む か し 唐 丸 籠 の 道

---

# 城の秋

大橋 迪代

城の秋水抜き調査はじまれり  
郷ひろみと鯉の格闘泥まみれ  
月代やまだ見つからぬ五百両  
さわ立てる鶴とおどおど近づきぬ  
穴まどひつるび一塊武者溜り  
内緒です番ふ秋蛇見しことは  
みんななみに列なす雲や曼珠沙華

お城の紅葉溪庭園の心字池の水が乾涸び、水馬やメダカが一縷の水に集まる異変が起きていた。御橋廊下の濠の水位も低い。測量棒とカメラを持った青年が池のふちを一回り、大声で尋ねると、昨日お城の水抜き調査をしたと教えてくれた。  
帰り際、イソヒヨが啼き跳ねながら、大きな固まりに近づいては離れている。蛇だと気付くまでに少し時間がかかった。動悸が怪しくなったこの事は、誰にも話していない。

# 秋そぞろ

星野和葉

眼科医にふくろふ数多風は秋  
難聴に優しく今日の法師蝉  
検査結果良好揺るる白木槿  
策にそそといのちの色を秋茄子  
「光る君へ」に寄り添ひ揺るる実紫  
稀な季に迷はず咲けり曼珠沙華  
薄ひと叢そよぎ一端の庭なりし

暑い暑い夏が終わるかと思つたら、九月に入つてもまだ暑い。秋は何処かへ行つてしまつたのだからか。そう言えば今年も蝉の声をあまり聞けなかつた。もちろん蝉の穴も、蝉の抜け殻も見あたらない。さびしい限りである。

散歩の犬に声をかけて吠えられたり、飼い主との会話がせいぜい。隣に住んでいても回覧板のやりとりだけ。老人会ならぬ「ふれあい会食」「おしゃべりカフェ」などに参加して脳の乾きを癒やしている。

# 百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

八月号

民草は「くさ」にはあらず遠青嶺

民草は人民を至るところの地にある草になぞらえて言った言葉で、もともとは『論語』に「百姓」（＝人民の意）とあるのが原初のような。「君子之徳風、小人之徳草」。青嶺は青葉に覆われた涼し気な山の姿を青色そのものと結び付けた季語だが、有徳の為政者を青嶺と見れば、その徳風に靡く麓の民草の幸福はいかばかりであろうか。

千年の杜を敬ふ青嵐

「杜」とは山などに自然に生えている樹木や草花だけでなく、その町に暮らす人々が協力し合い長い年月をかけて育ててきた豊かな緑のことである。千年の杜と言えば京都・下鴨の糺の森や奈良・春日大社のご神域などが思い起される。新緑の頃青葉の上を吹き渡る青嵐も、太古から続くご神威を敬ってかとりわけ清爽で雅びさを感じさせる。

二上りやいま風鈴の本調子

三味線演奏の基本となる調子を「本調子」といい、演奏の

中で変化をつける時などには「二上り」「三下り」といった調子も使われる。「二上り」は第二弦を二律（長二度）高めたもので、派手で陽気な気分や田舎風を表現する。風に乗る二上りの音色に誘われて、軒端の風鈴が軽快に鳴り渡るさまを三味線の調弦に譬えた粹な一句だ。

羅の羽織を恋ふる衣紋掛

羅（うすもの）は、経糸（たていと）を左右の経糸と絡み合わせて織る高級絹織物の技法で、大きな透け感のある織り模様の特徴である。また衣紋掛は衣服の袖に肩幅ほどの短い棒を通し、その棒を紐で吊して干す和服用の道具。表座敷の衣紋掛に掛けられた上物の羅の羽織はいかにも涼しげで、見る人にとっては眼福の極みとなる。

草笛の「りんご追分」岩木山

「りんご追分」は昭和二十七年五月に発売された美空ひばりのシングル『林檎園の少女』のB面楽曲で、舞台となった青森県弘前市のりんご公園には記念の歌碑が建立されている。薄幸のつがる娘を唄うこの曲を草笛で聞けば、北国への郷愁もしきり。津軽平野に裾野を広げ、津軽人から「お岩木山」

と慕われる名峰岩木山の姿が眼前に迫って来る。

## 九月号

### お天道様めがけて飛ぶよてんと虫

テントウムシの和名の由来は、枝などの先端に立って行き場がなくなると上に飛び立つ習性が、あたかも「お天道様に飛んで行った」ように見えるため、太陽神の天道からとって天道虫と呼ばれるようになったとされる。天道虫があの小さなカラダの何倍もある羽を点のある固い「サヤ羽」の中に畳み込み、いざというときにパッと開く飛翔技術は日本の研究チームによって解明され世界中の話題をさらった。

### 切妻や羅を脱ぐ御寮人

本を半分開いて伏せたような切妻屋根で、軒と直角方向の面を「妻」というが、この妻側の窓辺に外出から帰り羅(うすもの)を脱ぐ若奥様とおぼしき影が見える。御寮人は中世以降用いられた、主に女性に対する敬称の一つだが、「ごりよんさん」とくれば大阪船場界隈の商家の景か。絹、紗、明石、越後上布などの羅にうつすらと透ける佳人の面影がさまざまなロマンをかき立てる一句だ。

### 冷奴たつたひと言「おいしおす」

京豆腐は、京都特有の気候と風土に育まれた、千年以上の歴史を持つ名産品である。特徴は国産大豆一〇〇％使用の他、

①良質な地下水を使う②にがりではなく「すまし粉(硫酸カルシウム)」を用いる③独自の製法により内部に空洞が生まれる——の三点。冷奴は豆腐の濃厚な味わいを堪能するなら木綿を、軽やかな口当たりを楽しむなら絹ごしを、その日の気分や嗜好に合わせて選びたい。どちらも「おいしおす」。

### 噴水が準備してゐる次の曲

音楽と光と水を完璧に調和させ、さまざまな形や動きを演出する「音楽噴水ショー」は見る人に無限の感動を与える。北浦と公園の音楽噴水では、一回のショーで使われる曲は二、三種類で「ブランデンブルグ協奏曲」「水上の音楽」「トランペット吹きの日」などクラシック曲を中心に一日約十五曲が楽しめる。音楽とともに噴水が華麗に舞い踊る迫力もさることながら、一曲が終了し、次の曲を待つ間のわくわく感もたまらない。

### 丸まると火蛾も地産か道の駅

地産地消は地域生産・地域消費の略語で、地域で生産された産物や資源(主に農産物や水産物)をその地域で消費すること。地域の産物を手軽に手に入れる場所としては近年、主要道路沿いに道の駅が設置され、その主要設備として農産物(水産物)直売所が脚光を浴びている。それにしても道の駅の街灯に群れる火蛾まで地産とはよくぞ言ったり。丸々と太った農産物と鱗粉を撒き散らす火蛾との対比が見事だ。



# ゆずり葉

◆季音九月

檜 鼻 ことは

待針をはづし風鈴聴いてをり

波多野寿子

日本の夏に、視覚的にも聴覚的にも心地よい涼しさをもた  
らしてくれる風鈴。

根を詰めての裁縫にひと段落がついて、ひと休みし、くつ  
ろいでいると、風の音と風鈴の涼やかな音色が混じり合うよ  
うに聞こえてきます。心地よい響きに裁縫の疲れを忘れてほ  
つと一息されているご様子がかがえます。懐かしい日本の  
夏景色を見る思いで句を拝読いたしました。

優駿の駆くる大地や雲の峰

五明 昇

その馬はオラシオンと名付けられました。オラシオンとは、  
スペイン語で「祈り」を意味する言葉だそうです。宮本輝は  
小説「優駿」の中で、馬主となる和具平八郎にこう語らせて  
います。「生き物はみなそれぞれに美しい。だが人為的に作  
りだされてきた生き物だけがもつ不思議な美しさというもの

が確かにある。サラブレッドの美しさが、その底に、ある哀  
しみに似たものをたたえているのは、他のいかなる生き物よ  
りも過酷な人智による淘汰と、その人智だけでは到底計り知  
ることの出来ない生命との対立によって生み出されて来たか  
らなのだ」と。

句を拝読し、北海道の大地を駆けぬける優駿の勇壮な姿が  
まざまざと目に浮かんでくるようでした。

名塔を視野に納めり新樹光

島津初花

上田旅情と題した五句の中の一句。今年六月、初花さんと  
上田の旅を同行しましたので、懐かしい上田の景色が思い出  
されます。

信州上田駅より車で三十分ほど行った別所温泉近くにある  
安楽寺は、弘安年間に創建された信州最古の禅寺と伺いまし  
た。山門をくぐると右手に鐘楼、さらに進むと本堂があり、  
とても落ち着きのある佇まいの中に身を置くことができます。

本堂を左手に進み、狭い参道を登っていくと、やがて国宝八角三重塔の屋根と相輪が木々の間に見え始めます。初重に裳階が付くため四重に見えますが、日本に現存する唯一の八角三重塔は、こけら葺きの屋根、放射状の垂木、穏やかな屋根の反りがとても美しく、雨上りの緩やかな初夏の光の中で、その厳かな姿を見せていました。

### 一品は貴船の風や夏料理 大場順子

芹生峠を源とし、貴船の山間集落を流れる貴船川。万物の命の源である水の神を祀る貴船神社付近には、土産物屋や料亭が並び、春は山菜、夏は鮎、秋は松茸、冬はぼたん鍋と四季折々の旬の料理を楽しめます。この日は、夏の風物詩としても知られる貴船の川床をお楽しみだったのでしよう。豊かに流れる清らかな水と岩を打つ水の瀬音、涼風が吹き抜ける床での夏料理、下界の暑さが嘘のようなひと時、うらやましい限りです。美味しい料理もさることながら、美しい自然の中、貴船の風を一品として、日ごろの喧騒を忘れての会席、句と共に楽しませていただきました。

### 羅をぬける風あり谷中墓地 森川義子

「独りでの花見はたいいてい谷中に決まっていた。どの国においても、墓地は美しい。東京の墓地も例に漏れない」上野のれん会のタウン誌「うえの」に掲載されていたサイデンス

テッカーさんの随筆集「谷中、花と墓地」の一節です。まったく、読んでいると著者といっしょに花を愛でながら東京の下町を散策しているような気分になった随筆集でした。本当のところ、東京の下町をゆっくり歩いたという経験はなく、一週間ほど谷中付近に滞在して、随筆の場所を訪れてみたいものだとかねがね思っていたですが、句を拝読し、その思いを強くいたしました。散策を楽しまれているのか、お墓参りをされているのかは存じませんが、羅を纏い谷中を歩いておられる品のあるお姿に日本の美しさを感じた一句です。

### 大仏の耳朶ゆたか夏の空 西幅公子

そう言えば、大仏さんに限らず、仏像の耳は大きくてふくよかだなあと今まで見えていなかったものが見えた思いがし、調べて見ましたところ、「仏像の耳が大きいのは、衆生の声を漏らさず聴くため、仏の耳は通常手と同じくらいの大さに造られている」とか「見たものの発する声を聞く、耳で見るということを教えるため」という説明を見つけました。

大仏と聞くと、東大寺の盧舎那仏、高徳院の本尊「鎌倉の大仏」が頭に浮かびますが、句に詠まれている夏の空は奈良の空なのか、鎌倉の空なのか、いずれにしても梅雨明けの原色の青空と大仏さんのゆたかな耳朶を詠んだこの句の大らかな景に、心を遊ばせることができました。

季  
音  
雪



月代 菊池 ひろこ

月代の石段見ゆる連子窓  
萼透けし鬼灯ひがな夕陽色  
電灯の笠を高めに鬼灯活く  
秋祭米の袋を叩きみる  
街路樹暮れ外来種てふ虫時雨

指<sup>し</sup>差<sup>さ</sup>喚<sup>かん</sup>呼<sup>こ</sup> 五明 昇

サルビア燃ゆ海を見下ろす異人館  
アルプスの山巔峨々と蕎麦の花  
然りげ無く風を馳走の秋扇  
一山の蜂起の跡や葛の花  
野分中声のうはずる指差喚呼

鏡の妻境延昭

秋暑し島津初花

ダックスフロント処暑の胴長持て余す  
稲びかり鏡の妻に角がある  
黍嵐むかし満蒙開拓団  
芋嵐首相の首が挿げ替はる  
遺訓めく墨書の一字秋扇

秋暑や小屋に使はぬ鎌の錆  
間引菜の齒触り残す塩加減  
新涼や柏手響く村の朝  
先人の詠みし一句や水引菜  
水引草昔渡りし丸木橋

秋 椎野美代子

蕎麦の花 鈴木康世

台風の鈍足籠ゆる糠の床  
唇は 嘴 臭 ぞ 暑 き 秋  
あるかなしやの女ごころに灯る月  
秋粲粲ダイヤびかりの記憶の欠片  
秋意濃しのつびきならぬ齡なる

山並のゆるきでこぼこ蕎麦の花  
蕎麦の花咲く頃合を戸隠に  
水うまさ此の里蕎麦の花だたみ  
まはり来て又逢ふ人や蕎麦の花  
蕎麦の花盛る里曲の夕あかり

月 十倉和子

道しるべ 永野史代

仲麻呂の愛でし月代われも佇つ  
筑前琵琶佳境に入るや月昇る  
月の階居らざるごとく人居りぬ  
寺を辞すひとりひとりに月高し  
琵琶の音の余韻にうるむ良夜かな

湖水に胸を濡らして燕帰りけり  
また会ふ日まで病棟の空より帰燕  
燕帰る空の何処に道しるべ  
「帰る燕は木の葉のお船ネ」嗚呼帰燕  
齒こぼれのある阿六櫛白芙蓉

質 素 鳥羽和風

白寿の友 星野和葉

枝豆や質素な暮し身に付いて  
水引の花の結び目寿の膳  
山の雨夜寒を連れて下り来る  
夜寒さや温みの残る火消壺  
藁家の軒に柿吊る風情かな

白鬚をしごく會長秋祭  
並べて掛くる親子の法被秋祭  
重陽やさらりと席をゆづらるる  
重陽や白寿の友と酌み交はす  
「庭に出るな」と蟪蛄下駄を占領す

弾ける 町野広子

白芙蓉 森本早苗

白芙蓉いつもカーテン閉ぢし家  
白芙蓉人の気配のなき屋敷  
ほうせん花弾ける時は笑ふ時  
ほうせん花風が遊びに来て弾け  
ほうせん花喧嘩の覚えなき姉妹

白芙蓉永遠の別れの舞子坂  
一勺の秋水跳ぬる水琴窟  
校庭に声の弾くる野分晴  
ひらひらと狭庭生まれの秋の蝶  
志ん生の郭嘶や虫の声

夕日影 茂木和子

仲秋の月 山中みどり

文月の草に実のある裏厨  
藪草の殖ゆる窓辺に恋占ふ  
争ひは否百万本の向日葵よ  
行き擦りや芒ざかりの寺詣づ  
夕日影薄手招きしてゐるよ

秋祭終へ潮の香のすみだ川  
よく揃ふ手締め祭の鉢洗ひ  
寝静もるスカイツリーや月今宵  
かぐや姫の牛車が横切る良夜かな  
灯を消して月に見られて飲むワイン

生田民家園界限Ⅱ 網野月を

利根新涼 井上燈女

雨音はやがて虫の音白みつつ  
谷に入る今朝の秋日の剛かりし  
秋日差す雨戸の棧の旧びしを  
一朝と昼の区切りを秋日分け  
日を受くる茅葺き屋根や秋大し

己が影 石井喜恵

坂下る影先立てて月の客  
百の手を小粹に反す風の盆  
秋寒し己が影おく石畳  
白芙蓉風の触れゆく喪の袂  
蓑虫や細身に余る帯の長長

流れ寄る新涼の泡相寄り  
城新涼季節のうつろひ常に早し  
朝顔の鉢にひとりの隠し鍵  
大声で人を呼びたき利根新涼  
新涼や母郷はいつも水豊か

白桔梗 石山かつ子

置鉤をつぎつぎ仕掛け湖の秋  
女坂ゆるくて長し白桔梗  
十六夜の駆け落ちしたき置手紙  
しぶぶと燃ゆる生木や花むくげ  
秋まつりよよと泣き入る木偶人形



赤蜻蛉 大橋 廸代

穴あらば覗く兄妹赤蜻蛉  
水切りの石を弾くる秋の水  
飛石によるめくことも法師蟬  
推敲の達人待てど無月句座  
満月へしかと飛びこむ鳥四羽

白むくげ 大村 節代

幻影<sup>げんえい</sup>肢<sup>し</sup>語る受賞者秋の空  
品書の仮名文字読めぬ秋の宵  
ブルースの流るる田舎家白むくげ  
白むくげ一氣に暮るる山の駅  
真夜となり地元民だけ風の盆

時空世界 小倉 倭子

ベルセウス流星帯引く時空詩ごころ  
想ふ人に「帰心」を読まれ月今宵  
然りげ無く野菊の野路でつむぐ詩  
妄想の即かず離れず花芒  
思ふまま言の葉そよと秋の風

秋 思 栢尾 さく子

人を恨む心おそるる長き夜  
新涼の音たて野菜きざみけり  
沼の秋思はぬ場所に鳩の浮く  
新涼や何か言はねば口さみし  
こほろぎや夢に冷たき亡夫の手

# 季音月

関ヶ原

近藤徹平

黍あらし鳥津突破の関ヶ原  
風の盆閣に消えゆく影二つ  
拾ひ読む帯の寸評書肆は秋  
秋うらら古墳を登る園児帽  
泐民の歌人をしのびけらつつき

晩節

梅澤佐江

木偶人形に命吹き込む西鶴忌  
花野ある限りやさしき空の色  
鬼の子の浮世をのぞく日和かな  
花頭窓より臨む桔梗の濃紫  
晩節やガラシヤを偲ぶ白桔梗

初嵐

大場順子

百幹の竹を鳴かせて初嵐  
戸隠山の裳裾ましろし蕎麦の花  
平家谷の裔を守り継ぎ蕎麦の花  
影武者かともごふ闇夜の菊人形  
秋の旅「古寺巡礼」をふところに

初秋

山田美佐尾

胸に霧抱き浜辺を歩く女かな  
犬つれて朝霧浴ぶる橋の上  
初秋や鳥居くぐれば水の音  
初秋や少年独り逆上がり  
舞ひながら桐の葉一つ音もなく

良夜

森川義子

一湾の良夜さえぎるものなし  
遠ざかる昭和の歌をさく良夜  
永住の此の地ふるさと虫時雨  
朝夕に寸土を愛でし秋茄子  
道の辺の無縁仏に白桔梗

蜜の色

正木 萬蝶

秋燕や真昼につかる露天の湯  
天に生らば火球となりぬ鬼灯は  
真夜のほほづき鬼の宴の忘れ物  
花蕎麦や丹色の削げし摩崖仏  
夕間暮蜜の色濃き蕎麦の花

風の旅

丸山 マスミ

芝居跳ね今日を閉ぢゆく秋扇  
迷ひなき白杖の歩や緋衣草  
峡の闇胡弓溶け行く風の盆  
里祭直会を待つ薦被り  
螢草富弘発ちし風の旅

初嵐

高島 寛治

推敲を重ね深めて秋扇  
秋祭我の出番は何も無し  
稲雀率ある者が見当たらず  
一人づつ渡る吊橋初嵐  
糸瓜垂るひとつは外<sup>そつぽ</sup>方向<sup>ほう</sup>いてをり

秋彼岸

松宮 保人

棚経や若き僧侶は足早に  
あの人も白髪増えたり盂蘭盆会  
宿の湯に身を委ねけり秋彼岸  
湯上がりの裏山風や秋彼岸  
通草熟れ断崖に蔓手繰り寄す

行合

荒井 俱子

「めでたし」で終はる民話や星月夜  
カンナ燃ゆ発火しさうな休耕地  
真葛原かつては婆のほまち畑  
野分立つ喘いでをりぬ風見鶏  
枝豆や薩摩切子の酒器ふたつ

カクシヤク

松井 由紀子

七星の柄杓がこぼす露の玉  
ひいやりと径一寸の青葡萄  
新米の白粥うまき朝餉かな  
長命の朱盃にとろり菊の酒  
嬰鏢が書けぬカクシヤク秋日和

吾妻はや 渡辺 舍人

湧き継いで高志が競ふ雲に峯  
身投げするやうに刹那を黒鳳蝶  
君病めば細君が瘦す百日白  
白鷺イツ己が世界を踏んまへて  
地を恋うて果つる流星吾妻はや

天高し 池田 雅夫

安んずる大仏の笑み天高し  
秋風に乗り鳳の大滑空  
目覚めたる大器晩成後の月  
古着きて考の威光の案山子かな  
秋惜しむ賽の川原の風の舞

天高し 内田 恵子

山羊の乳搾る裏庭紅林檎  
南瓜ごろごろ無人直売巨樹の下  
坂道を上るは楽し天高く  
酔芙蓉己の個性探しをり  
リハビリの亜鈴は重し秋の蟬

上州訛 松本 光子

恙なく生きて健啖衣被  
新米や会話の弾む上州訛  
かつて父は兵たり青春衣被  
星月夜われ泣く母の軍国子守歌  
城沼の敗荷掘るは落武者か

新涼 川崎 道子

新涼や香りの残る青畳  
新涼や石庭を掃く若き僧  
朝顔にひと声かけて出勤す  
秋暑し狼煙台への煉瓦道  
宙を蹴る棒高跳や秋の雲

唐辛子 上戸 千津子

軒深く鎖編みされ唐辛子  
誘ふかに秋蝶二頭お寺坂  
充電か電線に群れ去ぬ燕  
六甲山早くも萩の乱れ咲き  
不意の訃報に闇は広がり虫集く

クイーンニーナ

野口和子

赤とんぼ 洩垂れ 小僧 老境に  
美しやクイーンニーナと言ふ葡萄  
大根蒔く土の匂ひを手に掬ひ  
レントゲンに写る背骨や百日紅  
秋の雷夢間に聞くや朝まだき

井上玲子

十和田湖をわたる細波涼新た  
新涼や釣りし魚に塩をふる  
鬼の子や地藏の袖に宿を借り  
夕化粧茜にしづむ秩父嶺  
月代やさざ波わたる琵琶湖畔

花野

松山清子

声あげて足踏み入るる大花野  
前を行く夫の背を追ふ大花野  
花の名を聞いて忘れて花野行く  
轟音の飛行機 真上花野行く  
コスモスの揺らぎ現はる友の顔

ちよつかい

福田千春

ちよつかいを出すは好きな子鳳仙花  
鬼灯もむ指の加減よ姉妹  
鬼灯を鳴らす口には矯正具  
秋燕や一年ぶりの定宿へ  
燕帰るまた静かなる過疎の村

つゆくさ

大塚茂子

露草の群れ咲き誇る休耕田  
螢草 忍城 囲む水の音  
露草や朝日に光る通学路  
梨を剥く潮騒の宿太き指  
秋めきてほつと一息六地藏

月代

熊倉千重子

山小屋に小さき天窓星明り  
いつの間に村が一つに秋祭  
月代や茅葺き屋根の残る里  
信濃ことば聞きつつ啜る走り蕎麦  
不揃ひも味のうちかと走りそば

物<sup>もの</sup>思<sup>も</sup>ひ 青木鶴城

線香の煙ひと筋虫すだく  
戦争を早も忘るる九月かな  
秋うらら何事もなき乾門  
赤とんぼ人差し指の遊ばるる  
物思ひや吾大の字の秋草野

漸<sup>しだ</sup>くの秋 日高道を

冷やかや鶯張りの高廊下  
太刀の名は関の孫六上り月  
月代や翁媪膝を交へつつ  
遠き日のことなど少し秋裕  
栗おこは配り令和の隣組

初盆 檜鼻ことは

八月や七十九枚目の写経  
何処よりはないちもんめ盆の月  
盆支度終へて仏間の灯りかな  
鈴虫や話相手のゐない夜  
送り火を終へて番茶の台所

秋彼岸 飛永鼓

縞柄の洗ひ晒しも残暑かな  
間引菜や罪の意識に嘖まれ  
間引菜やどの子も可愛い子沢山  
穏やかに挨拶交はす秋彼岸  
秋彼岸長目の花器に投げ入れる

竜胆 原田秀子

色も香も粹な一鉢菊膽  
研ぎ上げしナイフ冷やか水奔<sup>は</sup>る  
山雨去りりんだうの藍あざやかに  
無造作にりんだう活けて峯の茶屋  
竜胆や工女の越えし信濃路

☆ ☆

# 季音花

能登を遠見に

曲淵徹雄

伝説に生くる落人蕎麦の花  
初あらし病む身で迷ふ治療法  
盆波や能登を遠見に親不知  
お局を偲び小江戸を秋日傘  
乗れさうな雲がいくつか秋遍路

秋は宵

河野はるみ

蓑虫の曙色に包まれり  
鬼灯や袋裂き裂き四つに咲き  
鬼灯を口に含んで空模様  
手のひらで風押し返す風の盆  
糸電話の糸金色に良夜かな

時つ風

野田静香

海底に眠る船あり霧時雨  
江ノ電に時つ風沿ふ秋の海  
黍嵐途切れがちなる悲報かな  
絵の具溶く水しなやかに昼の虫  
スケッチの仕上げの色や花野風

帰校の列

横山君夫

蠟燭の火を攫ひゆく初嵐  
村一つ沈むばかりに糸瓜垂れ  
敬老日恋歌を歌ひ若返る  
若冲の墓のあたりか蚯蚓鳴く  
帰校の列伸び切つてゐる残暑かな

森の精

染谷風子

秋立つや内ふところに川原風  
パチンコ店に軍艦マーチ秋暑し  
落暉背に女一人の秋遍路  
水子佛に鈴の音虚ろ秋遍路  
啄木鳥の音に目覚むる森の精



濃霧

渋谷 きいち

廃村を丸ごと隠す濃霧かな  
山寺の破れ堂より霧の立つ  
連山は藍に変はりて秋の暮  
閉店の知らせは急に秋の暮  
大徳の眠き説法 女郎花

大道芸

保坂 翔太

夏の夜や鎮守の杜を光る眼  
風の色少しく変はる処暑の朝  
山風の心地よきかな秘湯処暑  
大道芸にさくらが一人つくつくし  
巡礼のみたらし 団子黍嵐

野菊晴

石川 理恵

石壁を割つて野菊の二三本  
子規庵に佳き風吹いて野菊晴  
来るはずのない人を待つ野菊道  
こんなにも熱を帯びたる今日の月  
十五夜のペランダに先客のをり

サルビア盛り

下川 光子

旧道のサルビア盛り静かなり  
一瞥のサルビアの紅まなうらに  
秋の七草巡りて寺の名を忘る  
この先はリフトに任す天高し  
秋暑し牌楼向かふ人いきれ

枝豆

笹本 啓子

稲妻を弾き返すやビルの窓  
秋の宵肘を尖らせ弾く楽器  
藪枯らし同行二人札所道  
枝豆やぼんと飛び出す出羽訛  
枝豆やをんなの呷る大ジョッキ

燕帰る

鈴木 木玲子

付けペンより不思議ワールド鳳仙花  
双子にはふたご語ありて秋うらら  
校庭の雲梯空に秋燕  
九輪水煙はるか過りて帰燕かな  
湯の町をぐるり旋回秋燕

秋の訪れ 石田慶子

ご神木なでて孫ゆく九月かな  
お駄賃に鬼灯二つごつき指  
軒を貸す店主のうつろ秋燕  
大河ドラマのうんちく語る秋扇  
本題は少し待つてね秋扇

秋の蟬 田中章嘉

秋の蟬己が命を減らし啼く  
虫籠に羽搏く蟬の哀れかな  
秋めきて旅の心の胸うづく  
キチキチと飛びしバツタに吉ばかり  
京舞妓残暑の残る夜の道

道なき道 宮崎チアキ

悠悠と飛び行く鳥や大花野  
月代や湖の女神の舞ひごろも  
黍嵐道なき道に農夫婦  
鱗雲流る間に間に榛名富士  
哀愁を帯ぶる胡弓や風の盆

十六夜 葛城千世子

左手に火花火右手で写メールを  
一斉に風になびかふ濃竜胆  
稗粟やミストグリーンの花器に活く  
和紙に水引マスク作りし十六夜  
水切りし献花の準備十六夜

海風 松島寛久

絵出して海風いつばい盂蘭盆会  
学生服若狭の色や秋の鯖  
逆縁に大夕焼や秋彼岸  
登校の峠の地藏あけび揺れ  
新盆に猫耳たてて経を聞く

箔置き帯 野村美子

秋色の橋幽谷の寸又峽  
菊の日に箔置き帯凜と締め  
二年坂舞妓ふたりの秋日傘  
弾琴の八十の手習ひ花芙蓉  
小雨ふる葬儀の朝や白桔梗

秋日傘

野平 美紗子

秋日傘前行く老女祖母に似て  
夜長かな琴弾く母の古写真  
秋の旅弾丸道路を利用して  
女郎花男郎花咲く夫実家  
坂多きサンフランシスコ秋の旅

秋の水

高橋 満耶子

刀研ぐ大きな父の手秋の水  
米不足に代ふる献立今朝の秋  
秋暑し家の片付け延び延びに  
車椅子のテニス優勝天高し  
秋まつり大迫力の「やりまわし」

野菊

瀬戸 雄二郎

子の机コップに活けし野紺菊  
磯菊の一尺四方に張り付いて  
八十にも登れし丘やいうがぎく  
無造作に漁船捨てられ荒地野菊  
ドローンの着陸点は野菊原

鬼の子

梅澤 輝翠

赤とんぼ花嫁乗せて人力車  
鬼の子のをんなは一生囲はれて  
階段のじやんけん弾み秋夕焼  
十六夜の心酔はする弾き唄ひ  
戦場の名も無き墓に虫時雨

秋うらら

越田 栄子

啄木鳥や豊かな森の立役者  
小げら鳴く諸手で覗く双眼鏡  
秋うららリュックの中身軽くして  
バス停のそれぞれにある秋うらら  
秋うらら森林浴の万歩計

道の駅

寺内 洋子

稗粟の大枝活けて道の駅  
深山より秋連れ来たる流れかな  
白雲に残暑を乗せて川流る  
千枚田に千の恵みや稲を刈る  
曼珠沙華群るる墓所はかしよを守るやうもに

大花野 西幅公子

蟋蟀や夜釣りの無聊慰むる  
街角や差して別るる秋日傘  
頂上や手に触れさうな星月夜  
月山へ参拝つづく大花野  
父の来ぬ糞虫拗ねず来て遊べ

星月夜 森和子

水底に貝の眠れる星月夜  
星月夜明かり疎らに塗師の村  
星月夜瀬音かすかに山の宿  
主婦の目の手秤確か梨を選ぶ  
鉄瓶の湯気やはらかに秋の宿

秋扇 山戸美子

秋扇子にGPSを持たされて  
候補者の千言如何に秋更くる  
千悔や手術及ばず秋の暮  
白檀の香りほんのり秋扇  
秋扇 運転免許返納す

秋の日 綿貫ひさの

ベレーの色捜す巢鴨や秋初め  
航跡の白きひと筋秋澄めり  
満員の小さき画廊や菊日和  
魚跳ねて広がる水輪秋の空  
秋湿愚痴ぐち愚痴の長電話

☆ ☆

# 現代俳句鑑賞

網野月を

ありてなき心の象とところてん  
死ぬるまで蛸に永きほたる時間  
昭和まだ遠くとならず古茶新茶  
星涼し年なりといふ歩き方

桑原三郎

〔俳壇〕9月号・ほたる時間より

一句目は「象」に込められた、かたち、ありさま、あらわれ、などの意味を思い巡らしながら読みたい。座五の季語「ところてん」の飘逸さも作者ならではのものなのである。

次の句は「永き」の解釈において読者によつて読みが変わるようである。筆者は「永き」に過ぎるのではなくて、十分な時間を有しているのである、と解した。

そして第三句は、中七の「遠くとならず」の二重否定が肝であり、第二句と同じく昭和への親近感を呼び起こしている作者のみならず、筆者も又昭和生れであり、勇気と呼び起こされて、心の中に熱いものが噴き出る感がある。

第四句の「年」は年齢ということと筆者は解釈した。夜歩きをしている作者の姿を彷彿とした。と同時に人生の歩き方をご教示頂いているようである。

ひそと来て知らぬ間に止み別れ雪

西村和子

〔俳句〕9月号・京とほくより

作者は「ひそと来」た「別れ雪」を認知したのである。ではあるが止んでしまった「別れ雪」は「知らぬ間」に見過ごして、聞き過ごしてしまったのである。「別れ雪」とはそうしたものである、ということではないのである。今年のこの「別れ雪」が正しくそうであった、ということなのである。他に「京とほくなりしと思ふ祭鱧」がある。

火焰土器雪解雫の共鳴りに

松田ひろむ

〔俳句〕9月号・火焰型土器より

実際に雫と共鳴している様が目の当たりになる句である。将に「雪解雫」の季語の斡旋が素晴らしいのである。火焰型土器は、岡本太郎がその芸術性を認めて専門家以外にも一躍有名となった縄文時代中期の代表的な土器である。火焰を模して造られたのか、それとも後世の人々から火焰型と認められたのかは判然としない。他に「いくさなき世へ八月へ火焰土器」がある。

金風の葬送シヨパン流れたり

中尾公彦

〔俳句〕9月号・共振れより

実際の御葬儀の場面なのかも知れないが、筆者はシヨパンの楽曲を聴いている場面なのではないかと想像した。ピアノ

ソナタ第二番第三章の行進曲である。レントのゆったりとした速度感と「金風」の柔らか味がまさに共振している。もしかしたらシヨパン好きの故人のための選曲であったかもしれない。他に「風祭鉄臭き水流しをり」「共振れといふときめきに蔦紅葉」がある。

露草に跑む心音聴くやうに

田中亜美

〔俳句〕9月号・風葬より

「露草」へは聴覚的なアプローチだけでなく視覚的にも嗅覚的にもアプローチしているように思われる。「心音聴くやうに」で、五感をフル活用していると筆者には思えるのである。他に「風葬といふをゆふぐれのコスモス」がある。

医学徒の爆死の丘や蟬時雨

吉岡乱水

〔俳句四季〕9月号・結社アルバムより

反戦の思いと「医学徒」への追悼の句であろうと解した。やはり反戦の思いと戦死者への追悼は八月の季語がびつたりとしている。暑い季節には日本人の心が一になるのである。

上枝より下枝に移る鳥の恋

藤本美和子

〔俳句四季〕9月号・結社アルバムより

大樹にとまる「鳥の恋」が上から下へ、下から上に移動するのがどういう原因によるものなのかは、勉強不足で分からないのだが、恋が枝を上へ下へするのを見ているのは発見であり、何とも長閑な風情である。

森濡れて少女の如き沙羅の花

武藤紀子

〔俳句四季〕9月号・沙羅の花より

ナイーヴな感覚の句である。とても微細な感覚を上五中七の措辞に託しながら、座五の季語「沙羅の花」を表現している。他に「兄が欲しいと沙羅の花にねだる」がある。

白萩の道来しひとの背に証

山本鬼之介

糸を張る老妓の眼夜半の秋  
旧町名は「筭町」よ蔦紅葉  
走り込む少年独り秋の暮

〔俳句四季〕9月号・秋語りより

一句目は背に白萩の花びらを認めた、と解釈した。読者にとっては読解し易い句になっている分、上五の季語「白萩」の存在感がストレートに伝わってくる。「来しひと」は幾分色の濃い服装をしていたと考えられるが、理屈で読むと句の趣が損なわれてしまうだろう。

次の句からは「老妓」の手練れぶりを感じ取ることが出来る。三味の糸を張っている「老妓」は、「夜半の秋」を皮膚感覚に感じながら、視線は糸に集中しているのである。作者も又「夜半の秋」を共有することの出来た一種の喜び、安堵感のようなものがそこには在る。

第三句の「筭町」は現港区西麻布のそれであろう。由縁の元は筭川なのか、それとも筭橋なのかは判然としないが、地理的空間と言ひ、名称の措辞と言ひ座五の季語「蔦紅葉」が相応しい町名である。

第四句の肝は「独り」である。決して「一人」ではないのである。漢字一文字に表意を込めようとする作者の真摯な作家魂を見る思いである。

# 『水明誌』を繙く（水明九月号）

長井 寛（一般社団法人現代俳句協会監事）

籐椅子の父の形に包まれたし 小林京子

老父は縁側の籐椅子に身を委ねながら日向ぼっこをしてきた、そんな様子が想起される。敬愛する父の世話係を健気にこなす作者の優しい眼差しもまた眼前に迫ってくる。丸くなった背が象られた籐椅子の背凭れにすっぽり嵌りながら亡き父を偲びたいと作者は詠っている。父の姿そのままの籐椅子はまさに人生の揺り籠であり、拠り所でもある歳晩になると此の世と彼の世の距離は紙一重、白寿前の筆者の母は日がな一日籐椅子を揺り籠にしていたことを昨日の様に思い出す。

父親と愛娘との麗しい感性を小津安二郎は『東京物語』の映画に表現、まるで俳諧の世界へと誘われてゆくようである。高浜虚子の二女星野立子さんが詠んだ句は（父がつけしわが名立子や 月を仰ぐ）である。立子もまた父をこよなく愛し尊敬して止まなかった俳人である。二十二歳で結婚した立子は父に對すめられ俳句の道に進んだ。

両親や親子また愛孫を題材にして詠む俳句は難しい。なおのこと掲句の父の籐椅子の存在が読む人を魅了する。年歳を重ねた筆者にとっては感慨深い一句である。父と過ごした尾崎放哉が詠んだ句は以下の通り――

父子で住んで言葉少なく朝顔が咲いた

栄一の貌してやんま低く飛ぶ 井上燈女

上五の栄一は云わずと知れた渋沢栄一のこと、その栄一が鬼やんまのような形相をして人民のために駆けずり回っているというのがその意である。三百年の鎖国から目覚めた蜻蛉が鬼となつて国造りに粉骨碎身する様子が見事に画かれている。また「低く飛ぶ」の措辞は栄一自身の心情を見事に言い当てているというよう。

江戸幕府の末期まで士農工商の厳格な身分制度が敷かれていたが、武士の時代の終焉が感じられる時代でもあった。黒船の来航や吉田松陰、坂本竜馬などが志を引き継いでゆく。農家の長男として誕生した栄一は後に一橋家に仕官、幕臣となり渡欧し新知識を習得して帰国する。

渋沢栄一の手によって日本の産業革命の幕が切つて落とされた。鉄道の開発、電力の供給、製糸工業の設立、学問への構築など輝かしい産業の礎が築かれてゆく。自身の著書『そろばんと論語』を旗印に五百余の会社設立に関与、壹万円札の貌となつて再び蘇つたのである。

散切り頭を叩いてみれば文明開化の音がする  
明治維新にこの歌が流行した。断髪の副産物は栄一が愛用した山高帽子であった。



## 想い出の夏そして惜別

かな女賞―田寺玲子さん・  
由良ゆら女さんへの一文

山本鬼之介

今年のかな女賞は、永年に亘り関西地区の水明を牽引された功労者である田寺玲子・由良ゆら女両氏が受賞され、選考日の翌日三月二十三日（土）の朝、主宰からお二人にお知らせの電話を掛け、玲子さんは在宅されていて大変慶んでくださったが、ゆら女さんは不在で連絡がつかなかった。ゆら女さんは脳梗塞を発症して入院されていたそうで、後日本人からの電話でやっと慶事をお伝えすることが出来た。

玲子さんは六月の全国大会に出席を望まれていたが、体調不良で残念ながら欠席、ゆら女さんも引き続きの入院で欠席となり、それぞれ代理者に賞状と副賞を受け取ってもらった。玲子さんが、八月二十八日に七年ほど前に患った大動脈解離の再発で緊急入院され、医師の懸命の努力も実らず、九月六日に逝去された。一方ゆら女さんは、入院後の様子が不明であったが、その後大阪市内の介護施設に移って暮らしておられることが最近になってようやく判った。しかし、俳句を再開される様子は窺えず残念である。かな女賞を受賞されたご両所への惜別の念をかみしめている。

## 【想い出の夏】

平成二十五（二〇一三）年七月七、八日、「シーサイドホテル舞子ピラ神戸」に於いて、関西夏行が開催され、水明本部側より、星野光二前主宰以下十二名（もちろん鬼之介も）が参加して、総勢二十七名の盛会となった。

西明石駅で、電車を乗り換えて舞子駅で下車したが、こちらから参加したY・M氏が電車の網棚にリュックを置き忘れ、五明昇氏が付き添って終点の須磨駅まで引き取りに行くという思わぬエピソードもあり、波乱に満ちた初日であった。

七日の一回目の句会（兼題「サンングラス」「蝙蝠」）で、

懸命に帆をあやつれるサンングラス　玲子  
交番に赤き灯一つ蚊喰鳥　ゆら女

と、かな女賞のお二人が見事超特選の主宰短冊を獲得された。

この句会の後、夕食懇親会までのひと時、皆で明石と淡路に架かる明石大橋（海上プロムナード）を見学した。この橋は、全長一九九一メートルで、一九九八年に完成した当時で世界最長の吊橋であった。そして、海面から明石海峡へ突き出した延長三一七メートルの回遊式遊歩道のガラス張りの床面に設えられた丸木橋渡りは、スリル満点の体験であった。

近年、関西例会で数回お会いしたものの、関東と関西でお会いする機会が少なかったお二人であった。今になって思えば、この催しに参加したことが貴重な接点で、人生の想い出となつてこれからも筆者の心を潤してくれることであろう。

かな女賞 自選五十句



田寺玲子

トルソーの肩へふはりと春シヨール  
音も無く船居へ潜る良夜かな  
ローランサン飾るリビング茄子の馬  
ハーケンの笥を返し山眠る  
激つ瀬へ枝を広げて梅三分  
青梅雨や森の奥なるレストラン  
金亀子一夜を灯す坊の宿  
初螢あすかの闇を深うせり  
昼の虫名も無き里の芝居小屋  
プロローグ長きドラマや寒卵

---

鶺鴒を吐かす女鶺鴒匠の顔けはし  
鶺鴒や懐紙へ受くる京干菓子  
飛魚とぶや玄海の波うねり来る  
リラ咲くやかの日と同じ美しき夜  
滝壺の瓶裏返り裏返り  
飽かず見る江戸からくりや暮早し  
寒明けの海へ落日音たてて  
浜の松なべて傾く十三夜  
進水の千の風船蒼天へ  
逃げ水を追ふさいはての直線路  
揺れ椅子にチェロソナタ聴く夜の秋  
背に懐炉点灯を待つルミナリエ  
長き夜の源氏香聞く奥書院  
蒼天に白靴映ゆる登檣礼

---

明易の船脚迅きオホーツク  
川激つ貴船参道青葉冷  
夏料理青き竹箸ぬらし置く  
今年竹風百態の嵯峨小径  
ワイン選る牡蠣コキールの焼きあがり  
寒を行く托鉢僧のをんをんと  
水澄むや川へ戸毎の石の階  
凧のつくる風紋駱駝の背  
大年の摩耶天上寺闇深し  
苺つぶし塞ぎの虫もつぶし食ぶ  
ボサノバの気怠きしらべ春の宵  
須磨琴の連れ弾きを聴くたかむしろ  
冬ざるる古墳の錠の新らしく  
俵屋の達人な英語膝毛布

---

薰風やひしほの匂ふ城下町  
ジヨンレノン座せし木の椅子月冴ゆる  
地震跡を残せる渚鱒東風  
春の宵螺鈿の筥をまた開き  
窓際のボトルシップや星流る  
辛夷咲くや光とらへて伎芸天  
金魚提げ石堀小路を行く舞妓  
隅の井は城のぬけ穴寒昂  
海峡は達磨夕日ぞ涅槃西風  
子午線へ天涯割りて星流る  
街中サンバ初夏の神戸を席卷す  
歳晩の大漁旗吊る魚うおんたな棚

# 王道あ・うん

## 大橋 廸代

玲子さんが水明へ入られたきっかけは、お父様の句集を上梓された折、谷野家代子さんのお推めで、平成八年に神戸句会へ入会されたとお聞きしました。

お父様の藤井寛声様は、私の父森脇俊之と同年で、すらりとお背が高く、眉のりりしい温厚で物静かなお人柄でした。当時の関西例会は、第四日曜日に、大阪森の宮の労働会館で行われ、私も参加させていただきました。

お父様の影響もあったのでしよう、平成十六年に新珠賞、同十八年に水明賞、同二十二年に季音賞をあとと言うまに受賞された実力のある作家です。

関西例会では、平成十八年から同二十六年迄、会計を担当して下さり、パソコンを駆使され、あらゆる相談にも適確な判断を示していただき助けて下さいました。

逃げ水を追ふさいはての直線路

明易の船脚迅きオホーツク  
ワイン選る牡蠣コキールの焼きあがり  
罫のつくる風紋駱駝の背

ラガーマンだった御主人様の同窓会には夫人同伴のようであらやましく思いました。北海道の利尻、礼文島の雄大な自然と味を楽しく満喫されて、大自然を凝視し、その高揚感をぐっと抑えた詠みぶりは、余白を残し句の奥行きを深めます。

金亀子一夜を灯す坊の宿  
鶉を吐かす女鶉匠の顔けはし

関西例会夏行は、高野山の高室院で一泊二日で行われ、薄暗い大広間に裸電球を沢山ぶらさげてくれました。二日目は、宿坊を五時に出発で奥の院を参拝、七時の勤行に間にあうように、汗びつしよりのとんぼ返りでした。

鶉籜が風に揺らぎ、鶉も人もあかあかと浮かび、闇をより濃くする宇治川の鶉飼を二隻の舟で見学、「顔けはし」に焦点が絞られ見事、マリコさんは今も現役鶉匠で鶉を育てています。

蒼天に白靴映ゆる登檣礼  
須磨琴の連れ弾きを聴くたかむしろ  
子午線へ天涯割りて星流る  
窓際のボトルシッブや星流る

登橋礼は帆船の最高の礼式。出航の際、帆桁の上の乗組員の「ごきげんよう」の発声が三度蒼天に響きわたり、船笛とともに出航する若者の勇姿はひとときわ輝き頼もしい。

細く割った竹を筵のように編んだ敷物はひんやりと心地よい。須磨に左遷された、在原行平を偲んでの連れ弾きは、物の哀れとともに夢幻の世界に誘われる。「たかむしろ」の平仮名が余情を深める。

子午線の町、明石に住む玲子さんは、豊富な句材をもち、研ぎ澄まされた五感と、語彙のゆたかさ、季語の斡旋の確かさを駆使して、立派な句を作られる。

ボトルシップの句は他誌で高評を得た玲子さんの代表句。

背に懐炉点灯を待つルミナリエ

平成七年一月十七日阪神淡路大震災の記憶を後世に語りつぐとともに、神戸の希望を象徴する行事のルミナリエ。玲子さんも大きな試練をくぐり抜けて来られました。鎮魂のルミナリエには寒さなど何のそのと気概のあふれた一句です。

ハーケンの銜を返し山眠る

滝壺の瓶裏返り裏返り

長き夜の源氏香聞く奥書院

大年の摩耶天上寺閻深し

海から一気に険しい山となる神戸、六甲山の岩登りを想起する。岩の割れ目に打ちこむハーケン、冬の空気に火を発する響きにも泰然自若の「山眠る」です。

源氏香を聞くとは何とみやびな奥書院の静けさが手に取る様で、「長き夜」の季語がゆるぎない。

ジョンレノン座せし木の椅子月冴ゆる

金魚提げ石堀小路を行く舞妓

隅の井は城のぬけ穴寒昂

歳晩の大漁旗吊る魚棚うおんな

四十才で銃撃され命をおとしたジョンレノン。妻オノヨーコは今も平和を叫び続ける。「月冴ゆる」は抜群の季語。

ねねの道へとつづく風情ある石堀小路、金魚と舞妓のとりあわせが、色彩あざやかで絶妙である。

寒昂の句は、新年句会で主宰特選の文句なしの名句です。

ファッション誌から抜けだしたような都会風の装いがとてもお似合の玲子さんは、ゆたかな趣味を楽しんでいます。

博識で、頭脳明晰、ことに俳句に真摯に取り組み、推敲に推敲を重ねる姿勢は私達の模範です。

ひたすら水明の王道を歩み、最高のかな女賞おめでとうございます。

# 達磨夕日は海峡に

森本早苗

水明最高の栄誉、かな女賞おめでとうございます。玲子さんととは、二〇〇四年の新珠賞同時受賞からのお付き合いで、その後互いの句会が一つになり、神戸大池句会になってより親しくなり、水明のお姉さんと思っておりました。僅か十日の入院で逝去され、ご本人はもとより句会一同驚きと悲しみに暮れております。句会の折や数々の旅の思い出と共にお洒落でいつも穏やかだったお人柄を偲びつつ、鑑賞させていただきます。玲子さんらしさが溢れる三句から、

トルソーの肩へふはりと春シヨール

お洒落な玲子さんは、もしかして自宅にトルソーを持っておられたのでは。明日着る服に合わせ、あれこれコーデインートを楽しんでる様子が目に浮かぶ。春の訪れに浮き立つ気持が溢れた軽やかな一句である。

ワイン選る牡蠣コキールの焼きあがり

日本酒もビールも口にされない方でしたが、ワインは別だったのでしうか。全国大会の前夜祭でシャンソンを何度も披露された玲子さんにはワインが似合う。エレガントな立ち居振る舞い、上気した頬が目には浮かぶ。

ボサノバの気怠きしらべ春の宵

ゆったりとした雰囲気と、素朴でありながらジャズの影響を受けた、お洒落で少し複雑な響きのサウンドで魅力のボサノバ。どことなく艶めいて華やきを感じられる春の宵に、エキジチックで都会的なボサノバを一人で楽しんでいる。少身体を揺らしながら。

進水の千の風船蒼天へ

蒼天に白靴映ゆる登橋礼

この二句は、二人で神戸港へ吟行した思い出の句である。句会の折の電子辞書を片手にすぐに調べる姿が思い出される句作りに没頭するあまり、夕飯の支度を忘れてしまうこともあったと先日ご息から伺った。真っ直ぐに、熱心に俳句へ情熱を注いでおられた。



鶯や懐紙へ受くる京干菓子  
長き夜の源氏香聞く奥書院

川激つ貴船参道青葉冷  
夏料理青き竹箸ぬらし置く

京都へは、一時間半程で行けるので句を拾いに訪れる事もしばしば。句から感じられる一服の清涼感、みずみずしさや所作の表現が繊細である。淑やかで博識な方であった。

鶯を吐かす女鶯匠の顔けはし

関西夏行で水明一行宇治川の鶯飼を見物した。鶯飼は平安時代、すでに行われていたと言う。風折烏帽子に腰みの姿の鶯匠の見事な手網さばき、パチパチと音を立てる篝火、火の粉が川面を照らす。川風に吹かれながらの優雅な船遊びであった。男勝りの鶯匠は何んと京美人であった。

金魚提げ石堀小路を行く舞妓

舞妓さんが金魚を提げている。お祭りで揃ったのか、はたまた誰かに貰ったのか。大事そうに提げてお座敷へと急ぐ。足元からこつぽりの軽やかな音が聞こえる。それにしても金魚の行方が気になる一句である。

街中サンバ初夏の神戸を席卷す  
背に懐炬点灯を待つルミナリエ

神戸生まれの玲子さん。初夏の神戸はサンバのリズム。冬には、ルミナリエが始まり、街中が煌めく。

子午線へ天涯割りて星流る

浜の松なべて傾く十三夜  
歳晩の大漁旗吊る魚棚うおんたな

地元明石を詠めば、玲子さんの右に出る人はいない。波の音や虫の音に耳を傾け月を愛でている。大好きな子午線の町。

海峡は達磨夕日ぞ涅槃西風

明石海峡に落ち行く夕日に遭遇するとは羨ましい。滅多に見ることが出来ない蜃気楼の一種で「幸運の夕日」と呼ばれている助詞の「ぞ」が効いており、喜びと感動が伝わる壮大な句である。

あきざくら優美な立ち居胸おくに  
心よりご冥福をお祈りいたします。

早苗

合掌

# 田寺玲子の一句



寒明けの海へ落日音たてて

春まだ遠い明石の浜に、激しく打ち寄せ静かに引く波、やっと冬を越すかの海が、音を立てて沈む落日を抱いているかのようです。新たなエネルギーを身体に注がれたかに震え、この落日と海が絵になっていつまでも心に描かれています。

大震災や病を乗り越えてこられた力強さを、ひしひしと感じます。沈む太陽が確かな明日を約束し、過去の苦しみを全て沈めて、新たな明日を連れてくるような、今を生きる事の限らない喜びを歓喜を、「音立てて」という表現に感じます。

関西例会で、大病の後も背筋の凍と伸びたお姿が思い起されます。兵庫の海の景に因んだお句を楽しみにしておりましたが、今は宇宙の海にて煌めく星々を愛でながら、大先輩は句作し続けておられるにちがいません。大変寂しいですが

玲子様のご冥福をお祈りいたします。

水澄むや川へ戸毎の石の階

空高く日差しもやわらかくなり、秋の気配が濃くなってひえびえとした感じの水を秋の水、又は秋水。そして特に感覚的に澄みきった感じを表現するのに水澄むといえます。

掲句から、湖や川ばかりではなく井戸や水甕の水も、台所で器を洗う水までも澄んだ感じが伝わります。実際に水が底深くまで見えるようです。川端に住む家々は戸毎に川に降りる階で鍬を洗い、菜を洗い又川舟を常にそこに置いて投網をしたり、釣り、置鉤など鯉・鯁・鯰などを漁ったり生活に欠かせないものでした。

秋になると川一面の菱紅葉。菱の実を大勢で集まって採って茹でて殻が固いのでなかなか上手に食べられなかったのを思い出します。幼いころ弟が川端で足を踏みはずし流れの中にはまり溺れていたところを近所の人に助けられたこともありました。そこに誰もいなくなつたら弟は今頃この世に居なかったと母がよく言っていたのを思い出します。

## 大村節代

### 揺れ椅子にチエロソナタ聴く夜の秋

神戸生まれ、神戸育ちの玲子さん。港に入る外国船や、異国の人々を身近に感じ乍ら、お育ちになられたのでしょうか。

関西夏行や高野山等の吟行会の折には、中原淳一のデザインかと思う洋服をお召しになっていらつしやいます。そしてそれが誠に良くお似合いで、見惚れたものです。

下語の夜の秋は、秋の季語ではなく、夏の終りにふと秋を感じた時の夏の季語です。作者ならではの季節感に感心しました。そして揺り椅子に身をまかせ、外国船の入港を遠くに見ながら、コーヒーを飲む玲子さん。ピアノやバイオリンではなく、チエロがいいですね。大型のチエロならではの音色に癒される玲子さん。実体験でなくては作れない句、作者の日常の一齣が伝わります。

## 上戸千津子

### 飛魚とぶや玄海の波うねり来る

飛魚が鰭を翼に替え飛ぶ姿は真に壮観です。海面のキラキラ飛魚の銀色が太陽に映え、彼方方から飛び出す姿は、何とも言えない光景です。次は何処から飛び出すかと興味津津、目星をつけ、海面を見つめて喜んだり、がっかりしたり、一喜一憂です。

飛魚は県境など何のその、気にせず自由に飛ぶ姿は澆刺として、若者を連想します。「錦鱗いたずらに澆刺たり」の言葉が浮びます。

飛距離を計っているのか、数を数える声や笑い声も聞えます。不思議なことに飛魚の此方に飛んで来る姿は一向に見えませんが、どんな顔で飛んで来るのか興味がわきますが残念です。只船と競争するかの様と同じ方向に飛んでいます。潮流との関係かなと思います。私にはわかりません。いつも後姿ばかりです。飛魚は何と言っても焼いて「出し子」にするのと濁りのない味の良なお清汁が出来ます。もう一度あの飛魚の光景を見たいものです。

## 川崎道子

### 金亀子一夜を灯す坊の宿

関西例会でお会いする田寺玲子さんのたたずまいは、優雅で俳句もその通りです。

毎年行なわれた高野山の寺院での夜の句会で、緊張した静けさの最中に一匹の金亀子が飛びこんできました。

その時の金亀子の動きに、心が傾むかれたものと思われまます。

「一夜を灯す」と言う表現がとてもお上手で情緒的、山寺でなければならぬ静けさの中の句会、その中で金亀子の動きを、しっかりと、とらえて詠まれています。句会の静けさと、金亀子の羽音が、目に浮かびます。

## 俣屋の達者な英語膝毛布

レトロの雰囲気を引きつけて、人力車が復活している。走っているのはもっぱら観光地。京都、鎌倉、倉敷、湯布院などでも見かけるが、どこよりも人力車が似合うのは東京・浅草ではないだろうか。印半纏にパッチ、地下足袋と云ういなせな格好の若者が、溜まり場の雷門あたりで客を乗せ、「あらよ」と叫びながら威勢よく走り出していく。

観光地には、ガイドブックや情報サイトにも載らないような魅力がたっぷり詰まっている。そんな町の魅力を知り尽くした粋な俣夫たちが、軽快な走りとガイドを提供する特別なひととき。俣夫の中には英語はもとより、スペイン語や中国語をものする手練れも居て、サービスに余念がない。

客が乗車の際に掛ける赤い膝掛けは黒い人力車に映え豪華さを演出する小道具だが、冬は暖かい毛布、夏は涼し気な薄物を使っている。料金は多少高めだが、目線の高さが新鮮で、素敵なカメラスポットが得られる人力車の魅力を彷彿とさせる一句だ。

## ワイン選る牡蠣コキールの焼きあがり

焼きあがったばかりのコキールにセラークら取り出したのは程好く冷えた白の辛口か。叶うならお相伴に預かりたいと思う一句である。宴会料理の冷めかかったコキールでなく、ホワイイトソースが焼ける音と香りが聞こえそうである。料理同様に鮮度が大事なことを納得させてくれる。

改めて、かな女賞受賞おめでとうございませう。十年程昔になるが、水明通巻一〇〇〇号記念の十和田、津軽吟行旅行が忘れられない。関西から田寺さんと森本早苗さんの二人が青森空港で合流し、参加された。太宰治生家「斜陽館」前の三味線会館で詠まれた。鳴り響く津軽じよんがら風薫る。が記憶に残る。そして、関西夏行でお世話になった地元明石の舞子浜、神戸ポートタウン、有馬温泉での日々が思い出されてならない。

## 鶯や懐紙へ受くる京干菓子

生まれ育った福井県奥越地方は仏教が盛んな土地柄で、百戸ほどの集落に四軒も寺がありました。生家の近くにあった檀那寺へ月に一〜二回、お米の入った布の袋を「ござんまい」として届けていました。準備するのは祖母で届けるのは子供だった私の仕事。持って行くとお駄賃として貰うお供えのお干菓子が楽しみでした。大人になって、本物の。お干菓子を食べて、姉たちがそれを喜ばなかったのを納得した味でした。

懐紙に受くる。の表現が京菓子の繊細さを感じさせます。そして、まだ上手に鳴けないう鶯の声を聞きながらお抹茶をいただく。いかにも京都らしい風情ですっきり感もあり、ひよっとしたら和服だったのかも思ったりもします。難しい言葉もなく驚くような情景でもないのに、とても心にしっくりくる句に仕上がっています。作者の雰囲気そのまま映し出されたような句に思えました。

## 十倉和子

### 蒼天に白靴映ゆる登橋礼

登橋礼は帆船に人を配置しお見送りの皆様に対して表敬の意を示して行かう帆船の最高の儀礼とか。かつて私も練習船日本丸の登橋礼の映像を見た記憶があります。

蒼天を背景の帆船に等間隔に踏ん張る若人の白靴、その白靴は如何なるシーンの白靴よりも美しく輝いています。乗組員達の「ごきげんよう」の三唱、岸壁の群衆のどよめきも聞こえてきます。

さりげなく詠まれていますが出航の壮大な光景が伝わり感銘を受けた一句です。  
玲子さんとは久しくお会いできていませんが、毎月の通信句会で優雅で格調高い玲子句を拝見できるのを楽しみにしています。

かな女賞おめでとうございます。

## 星野和葉

### ローランサン飾るリビング茄子の馬

掲句に出合った時「ええっ」と思わず声を上げそうになった。玲子さんに何処で詠まれたのかお聞きしたいと思ったが、敢えて聞かずに鑑賞しようと思う。

実は、星野紗一元主宰の家のリビングにも（思い違いでなければ）ローランサンの少女の絵が飾ってあった。何号か分からないが大きな絵であった。何度も訪れた部屋であったのに今はもう家も無く、ローランサンも分からない。玲子さんが何かの折に紗一主宰の家を訪れたとすれば、筆者と同じ部屋を見ての作句と思う。とすると親しみがわく。季語「茄子の馬」が気になるが、紗一家もリビングの隣は和室であり仏壇もあった。お盆の頃であれば納得がいく。ああ！胸が熱くなってきた。久し振りにローランサンのリビングと紗一、明世夫妻と義母まで思い出させて貰った。それに、関西夏行の事までも。その節は何かとお世話になりました。

「かな女賞」おめでとうございます。

## 町野広子

### 歳晩の大漁旗吊る魚棚うおんなな

四〇〇年の歴史を持ち、明石や神戸の地元では「うおんなな」よ呼ばれる食の台所。全長三五〇メートルのアーケードの下には、鮮魚店や海産物を中心に百軒もの店が並ぶ。昼網の明石鯛やタコは有名である。又、名物の「明石焼」のお店も多数あり、年中活気に溢れている。

掲句は、年末のその地を詠んでいる。平日でも賑わっている事を思えば、年末の常にはない人々の昂揚感や、場の盛上り、騒めきが伝わって来る。又、大漁旗が更なる賑わいに華を添えている。

地元を愛し誇りを持つ、静かなお人柄の作者の心踊る一句。

私事ながら、昨年何年か振りに両親の墓参りに帰省し、その足で神戸の姉の元を訪ねて、魚棚デビューをしたばかりで、共感の一句に出会えました。

山本 鬼之介 選

水  
明  
競  
詠

兼  
題



秋涼しいつせいに抜く濠の水  
新涼や胴長靴の勢そろひ  
吾を抜きて薫る青年涼新た  
悲報うく白一色の牽牛花  
再会を約す霧笛の「移情閣」

和歌山 大橋 勉代

暮会所に天狗居ならぶ良夜かな  
蹴轆轡の足裏になじむ秋涼し  
朝顔と吾に水やる路地真昼  
新涼の駅より仰ぐ茜富士  
朝顔や白む札所に巡礼歌

伊 奈 菅原 卓郎

ペリドット色の茶を喫す涼新た  
涼新た少し高めのタイヤ庄  
あさがほの巻髭の先白き星  
あさがほの名残の紺の更に濃し  
秋宵や夜会の鬘をあれこれと

さいたま 網野 月を

「新涼」「秋涼し」「涼新た」の傍題に限る  
「朝顔」「牽牛花」の傍題に限る  
「会」（詠み込み）※秋の季語で詠む

新涼やびたりと決まる帯の位置  
新涼や白絹すべる裁ち鉢  
朝顔の紺の明けゆく潦  
朝顔やひとつ残せし利休の氣  
もう会えぬ距離は花野をゆく如し

横須賀 大場 順子

払眺の星の瞬き牽牛花

久喜 梅澤佐江

新涼や舟唄高き水馴れ棹

さいたま 丸山マスミ

一粒の真珠のピアス涼新た  
新涼の足裏さらりと青豊

涼新た朝風皆きハイヒール  
秋涼し過ぎゆく風の息づかひ

秋涼し捏ぬる陶土の匂ひ立つ  
草の花会釈を交はす片ゑくほ

朝顔の思案顔なる遊び蔓  
教会の足踏みオルガン蔦紅葉

雨上がり朝顔の蔓かけ昇る

さいたま 寺町知子

朝顔のL.Lに紺行き渡る

若狭 鳥羽和風

牽牛花蛇の目のやうに開く朝  
庭下駄の軽き音にも涼新た

朝顔の本気で絡む蔓の先  
新涼や搗ち割り添ふる活け造り

新涼や板間ひんやり足の裏  
萩の風ひとむら越しの遠会釈

浮雲の影も田に浮く秋涼し  
コスモスの会釈に集団見合ひかな

秋涼し一期一会の女人堂

大村節代

さいたま 境 延昭

朝顔に五感のゆるびある不思議  
仮の世へ命を燃やす牽牛花

朝顔の蔓棚に知る几帳面  
尾根道を熊除けの鈴秋涼し

密会の階段さしむ秋の宵  
耳を立て息ととのふる秋涼し

芋煮椀主家貫禄の会津塗  
朝顔の花それぞれに水のいろ

舟唄や新涼運ぶ最上川

五明 昇

人影のふゆる公園涼新た

松井由紀子

涼新た駒の嘶く蕎麦処  
朝顔をいなせに捌くり言葉

誰にでも会釈初秋の治療院  
秋涼し袖ある衣を欲る腕

朝顔に江戸の風立つ佃島  
会ふ術もなき人恋し十三夜

朝顔を咲かせつづけて無事の家  
新涼や薪割り斧がひかり出す

老松に庭師の矜恃秋涼し

新涼や御門を守る五葉松

朝顔の背くらべする始業式

身に入むや会津に「仕の掟」あり

秋涼し憂ひ湛ふる水の星

新涼や帯に根付けの福小槌

朝顔に声掛けて寝る夜勤明け

会報に旧師の訃報そぞろ寒

退院し朝の新涼貪りぬ

朝顔の人見知りせぬ蔓の先

新柄の並ぶ老舗や涼新た

朝顔や竹垣越しの笑みに笑み

松手入れ会釈を返す若頭

息災と電話の向かう涼新た

朝顔や昼間と違ふ夜の顔

新涼の燭細くして文殊堂

安曇野の水滔滔と涼新た

ひらかんと紫紺するどし牽牛花

故郷の垣なきくらし牽牛花

再会を固く誓ひて温め酒

さいたま 日高道を

新 暦文

青木鶴城

川 口 森川義子

朝顔の律儀にひらく狭庭かな

新涼や李朝白磁の今朝の卓

納豆のさらりとねばり涼新た

碁会所に老くる新顔秋涼し

新涼やさ迷ふやうに旅をする

襟足をなぶる触れ毛涼新た

秋涼し沼の国防色うすれ

朝顔の一日の色を咲きつくす

上りつめ空をいざよふ牽牛花

そぞろ寒百会たたけば身にひびく

朝顔の鉢を並べて路地暮し

朝顔や助六偲ぶ花川戸

新走り庄助さんは会津人

朝の雨宿し朝顔鮮やかに

新涼の風の撫でゆく青畳

生垣を被ふ藍色牽牛花

朝顔の折り目正しき傘のごと

大地ゆく新涼の風生きてをり

奥つ城に刻む諡涼新た

行く秋や会えぬ人への一行詩

横 浜 正木萬蝶

さいたま 曲淵徹雄

染谷風子

熊 谷 越田栄子



目の合うて交はず挨拶涼新た  
新涼や老舗の宿の竹人形

若狭 檜鼻ことは

筆文字の夢二の手紙秋涼し

朝顔のひとつふたつと咲きにけり  
懐かしき人に会うたり秋彼岸

草加 河野はるみ

新涼や触れ毛揺るる石畳  
垣根越え横丁抜くる秋涼し  
屋根伝ふ根つこは何処牽牛花  
茶会終へ頬染めそぞろ良夜かな  
女子会の御開きならず寝待月

会者定離真つ盛りなる紅葉山  
再会に力の握手秋の雲  
浅酌のをとこ胡坐を秋涼し  
朝顔の蔓の伸び代あの部屋に  
朝ごとに数ふる漢牽牛花

星野和葉

朝顔の藍母の嫁ぎし日の鼻緒  
新涼やどの家もみな窓開け放つ  
浜辺にて沖見る漁夫や涼新た  
秋晴れに会釈続くや山の道  
二十番線都会の駅の虫時雨

さいたま 梅澤輝翠

新涼の風やはらかに唇に触れ  
祝宴のグラス触れ合ふ涼新た  
二三言交す会釈や花芙蓉  
抱擁を解くごとくに牽牛花  
新涼の夕日染めゆく水平線

石井喜恵

朝顔の苔のほぐれゆく夜明け  
一斉に百の朝顔そよぐかな  
新涼や市に集まる人の声  
ガウディの教会未だ秋深し  
竜淵に潜みし夜を密会す

小林京子

会釈して行き交ふ小道彼岸花  
朝顔の蔓の行く先侮れず  
新涼や大きく掃ふ竹箒  
朝顔に始まる日々や路地住まひ  
新涼の大川渡る列車かな

高島寛治

さいたま 清水桂子

朝顔や小さき茶房の蓄音器  
君との間少しちぢみぬ牽牛花  
新涼やぐんぐん進むビル工事  
朝顔や上手な嘘を考ふる  
秋日和犬も参加の「歩こう会」

さいたま 石山かつ子

朝顔の藍に始まるひと日かな  
秋日傘傾ぐる人の遠会釈  
涼新た背筋ぴーんとヨガポーズ  
朝顔や大輪の青そらに溶く  
美容室の弾む会話や秋めく日

さいたま 菅原真理

水供ふ紺の朝顔泳がせて  
丁寧に交はす会釈や涼新た  
会津名産みしらず柿と地酒来る  
新涼や「婆ばあさん」の会動き出す  
新涼や猫の食欲やや戻る

神戸 森本早苗

涼新た伝馬のくぐる日本橋  
朝顔の並ぶ軒先佃島  
曼珠沙華会釈を交はす野辺の墓地  
朝顔の上るマンション非常口  
学童の乗り合ふ渡し涼新た

行田 近藤徹平

ドイツ新涼芝一面に果実降る  
新涼や肩に掛け見る妣の帯  
寛の水音となる刻朝顔咲く  
朝顔へ夜風のごとく近づけり  
飼猫も一期一会よ夜長し

東京 菊池ひろこ

病室の面会迫る秋夕焼  
出会えずに改札口を去りし秋  
朝顔の水やり日課始まる子  
新涼の茶葉の焙煎五軒先  
秋涼し湖畔の宿のミルクテイー

さいたま 岡田宣子

新涼に会釈で別れそれつ切り  
句会の窓に新涼の風迎へ入れ  
朝顔に覗かれてゐる朝の顔  
朝顔の藍に底なし姉の帯  
久方の友と会ひたる放生会

若狭 島津初花

蝦夷富士の全容霽れて秋涼し  
日もすがら新涼の雨沼に落つ  
新涼やすこし辛めの吟醸酒  
五歳児が画紙一ぱいに牽牛花  
会席の締め丹波の栗ご飯

池田珪子

車窓より秋涼の香の耀へり  
単線に二本のレール秋涼し  
標識に群るる朝顔一番線  
そば濡れて昭和の色の牽牛花  
可惜しむ旅の一会や芋の露

さいたま 皆川更穂

菊人形人気作家のサイン会  
新涼や大の字に寝る青畳  
もてなしの会席料理月を待つ  
朝日影水滴光る牽牛花  
冷まじやビル風荒るる大都會

さいたま 反町 修

朝顔に囲まれ居れば鯉呼吸  
咲きのぼる朝顔空と融合す  
朝なさな咲く朝顔と空のいろ  
山りんだう会釈をかはし擦れ違ふ  
遠会釈かはして別れそれつきり

茂木和子

鴻巣 大塚茂子

沐浴の赤子伸びのび涼新た  
色深し今朝の牽牛花隣けり  
くるくると巻くのが流儀牽牛花  
着せ替へて会ふ同胞や秋の風  
ひよいとまた会える気がして萩日和

青銅の神馬に触れて涼新た

上尾 横山君夫

神護寺の石段に風涼新た

川口 野田静香

新涼や箒目しるき寺の庭

棟方の菩薩に祈る涼新た

朝顔や町屋名残りの京格子

廃屋の垣に朝顔こむらさき

初咲きの朝顔抱へ見せに來ぬ

紅葉山再会約し小屋を出づ

陵やおんぶ飛蝗に出会ひたり

木の実独楽幼き日日に会ひたくて

前掛けを換へしお地藏秋涼し

さいたま 保坂翔太

朝顔の蔓どこまでも自由なり

東京 石川理恵

朝顔や平凡の日々有り難し

学校の緑のカーテン牽牛花

部活の子朝顔数へ教室へ

きざはしのやうな雲あり涼新た

見知らぬ人に返す会釈や秋うらら

新涼やお香満ちたる鳩居堂

秋高し村の子牛の品評会

面会に浮かぶ一句や瀬祭忌

秋涼シタクト一振り蒼穹へ

さいたま 霜多光代

秋涼し黙の深まる銘刀展

密やかな再会ベガと牽牛花  
蝶豆バタフライビーと言ふ朝顔咲かせし人の奥床し

横浜 永野史代

朝顔や政治は難し横目して

新涼やいく分細面の教師

朝顔や今し微光の紺ふかく

水流す厨すずやか新涼の

秋澄めりトレモロの調べ夜会席

朝顔を垣根に這はせわび住まひ

新涼や会話明るき生徒たち

若狭 松宮保人

朝顔や今朝雨樋を捕らへたり

新涼の切つ先町を駈け抜くる  
新涼の風の中へと出帆す

さいたま 池田雅夫

涼新た埃を叩く旅靴

朝顔と挨拶交はし登校す

朝顔の棚に主柄現れて

朝顔の濃むらさき目を射抜くなり  
念願の再会祝し温め酒

名水や吟流れくる観月会

新涼にボルサリーノの鍔上げて

さいたま 森下山菜

秋涼し髪を切るとき立つ小指

牽牛花数多のペット眠る庭  
小さく淡い原種朝顔三回忌

相模原 町野広子

「寛解」と短きメール牽牛花

海老茶なる朝顔咲かせ友睡る

新涼や四棟同時に着工す  
新涼や義賊の墓石削らるる

人と会ふ遊び大好き瀬祭忌

金秋の小さな巢箱神に会ふ

所沢 関根千恵

今年酒酔ひごちなる試飲会

大窓を開け新涼の風通す  
路地新涼畳屋ひよいと担ぎ出す

深谷 井上燈女

新涼の風に驚く仔犬の尾

姉さんの嫁ぐ日碧き牽牛花

朝顔や隣り同志の飾り窓  
朝顔や男児安産の声あがる

兄妹無患子の実を拾ひ会ふ

沈黙の通じ会ふ仲梨を剥く

新涼や時候の俳句こむづかし  
涼新たなかなか抜けぬ怠け癖  
朝顔はセザンヌの青鍼灸院  
朝顔や結び目揃ふ四つ目垣  
会釈するだけの挨拶秋の暮

さいたま 荒井 俱子

再会を約し名代の走り蕎麦  
高みより遠会釈して松手入れ  
撩乱の白き朝顔陣屋跡  
涼新た敬でて聴く夕の鐘  
メンデルの法則違反牽牛花

高崎 原田 秀子

朝顔に心を洗ふ今朝の庭

越谷 阿部 幸代

朗々と老師の読経涼新た

さいたま 下川 光子

「かあさん」と妻を呼ぶ夫朝顔の棚  
棚田から葉書一枚涼新た  
秋涼し孫が手を引く家路かな  
同窓会明治の花圃のさざめけり

新涼の風をいただく盆の窪  
朝顔やエプロンで拭く児の涙  
朝顔の侵入したるポチの小屋  
再会を誓ひて別る走り蕎麦

新涼や真白きシート高々と

さいたま 笹本 啓子

新涼の花籠母へ一周忌

渋谷 さいち

朝顔を咲かせ気楽な路地住ひ  
流派など無くて朝顔奔放に  
朝顔や小さく咲きて青が好き  
秋風や友の減りたるクラス会

苦土石灰撒きて菜園涼新た  
朝顔に埋もるる床屋サインポール  
朝顔の今朝は錆たる三輪車  
会津街道ゆく尾瀬は秋の水

新涼や眼窩内腫瘍摘出す

杉戸 佐々木 史女

燈下親しや軍師に出会ふ場面視る

平塚 丸屋 詠子

新涼や直売所ある曲り角  
朝顔や蔓のび子等の通学路  
来訪し先づ朝顔誉むる友  
金賞の久喜の梨買ふ友と会ふ

秋の山迷ひて出会ふ河童淵  
新涼や夜をあやなすプレリユード  
六方を決むる役者よ秋涼し  
涼新た時を重ねし古戦場

新涼や心身の澁とかしけり  
朝顔や朝の目覚めは笑顔なり  
にはとりの羽ばたき一気涼新た  
今朝の庭朝顔吾を歓迎す  
五人会皴のほころぶ菊の宴

さいたま 山岸久美子

新涼の音無く木の間梳く風よ  
新涼や波は静かに重ね合ふ  
朝顔と傘を咲かする路地親し  
プログラム翳す父母席運動会  
再会の何も語らず月の客

さいたま 本橋稀香

一礼し潜る島の子涼新た  
銀輪の坂新涼の風と飛ぶ  
畑覆ふ天上の青牽牛花  
たくましく尾瀬ゆく歩荷秋涼し  
涼新た出会ひの楽し靴磨き

西幅公子

新涼や北の街から来る葉書  
採れたての卵ふるまひ涼新た  
朝顔の水やる人のピンヒール  
井戸水を浴ぶる長屋の牽牛花  
同窓会御国自慢の新酒汲む

東京 石田慶子

新涼や給料前の二八蕎麦  
新涼のオーライの声伸びにけり  
朝顔と話す残業明けの日も  
朝顔や歩いて母の実家すぐ  
会えぬゆゑ会ひたくなりぬ星の恋

吉川拓真

狭霧分け挑む会戦兵逸る  
秋涼し仰ぐ夜空の光跡や  
朝顔の姿みへたるや高温に  
風呂上がり仰ぐ夕空秋涼し  
積雲の多く有りしも秋涼し

利根 倉田星歩

朝顔の蔓行きどころなき自由  
魅了する天上の青牽牛花  
密会の弁解ばれて牛膝  
新涼や靴の中敷真新し  
新涼の白湯に昆布茶をひとスプーン

横浜 福田千春

どこからか朝顔咲けりと夫の声  
朝顔の素颜に出会ふ朝の庭  
朝顔の清楚に並ぶ垣根かな  
垣を這ふ名残りの朝顔形良し  
涼新た「名残り雪」てふ蘭咲けり

さいたま 野平美紗子

新涼やレースカーテン踊り出す  
菜園の土をかき混ぜ秋涼し  
朝顔や電線に乗り悠悠と  
檸檬食みママさんバレー開会す  
句会終へ反省しきり温め酒

さいたま 緒方みき子

新涼の空清らかにちぎれ雲  
新涼の風吹き抜くる湖畔かな  
朝顔の蒼をかぞへ明日に夢  
究極の色は白なり牽牛花  
会釈して行き交ふ山路天高し

さいたま 井上玲子

朝顔や明日は赤青半半に  
朝顔や「コノハナナニ」と異国の子  
新涼や積まれし雑事今日限り  
涼新た白き頁を埋めにけり  
不用意に会釈返せし良夜かな

綿貫ひさの

新涼や一夜の雨の露座仏  
新涼や真白き膝へ露天の湯  
朝顔の蔓の見てゐる会議室  
朝顔や朝な朝なに覗く吾子  
無月なる都会の海に漂へり

綿引まりこ

電気工都会の長き夜を灯す  
秋芝居役者ごろ寝す集会場  
往年の女子の女子会十三夜  
新涼や路にはいまだ昼の熱  
一句書き留む朝顔の咲く道の端

吉川 杉浦千祐

藤棚の莢果揺るるや涼新た  
裏木戸より朝顔ごしに回覧板  
秋日和ひよいとおとなふ敬老会  
蜘蛛の囀を払へばいつか秋涼し  
朝顔や濃いめに立てるモカコーヒー

加藤でん治

かなかなや会話のごとくメール打つ  
新涼や匂ひ残せし通り雨  
朝顔を摘みて色水遊びかな  
海の色放つ朝顔休耕地  
カレー食むサーブスエリア秋涼し

藤岡 野口和子

時の鐘響く町並秋涼し  
新涼や墨の香著き御朱印帳  
朝顔や行く先決めぬ一人旅  
雨音にいよよ青増す牽牛花  
魚屋のト口箱重ね牽牛花

森美枝子

初めての出会いひはシネマ後の月  
朝顔の覗くペア席カフエテラス  
老老の粹な挨拶牽牛花  
新涼や一息いるる山の肩  
新涼や白帆向かふは「双耳峰」

さいたま 秋谷風舎

朝顔は人に甘えて蔓延ばす  
生産緑地のフェンスに絡む牽牛花  
会釈したあの方はたれ芋煮会  
久久に会えた輩涼新た  
ロードバイク「空気圧良し」新涼来

さいたま 飯田忠男

六根清浄唱へて秋の発表会  
朝顔の蕾かすかに濃紫  
朝顔の蔓たどりたどりに小さき赤  
新涼や叡山よりの鳩の湖  
涼新たまづは地酒で乾杯す

川崎 鈴木玲子

朝顔に団十郎とはまた粋な  
時を聴く五百羅漢や秋涼し  
うねり響く団扇太鼓や万灯会  
コンビニの「おでん有」秋涼し  
朝顔を実篤まねて絵手紙に

駒谷行雄

新涼や写経の墨の香の清し  
昼も咲く朝顔に興殺がれけり  
朝顔や庇ひ庇はれ行くふたり  
誰が植ゑしあさがほなるや墓に蔓  
朝顔の縋るものなく地を這ひぬ

枚方 寺内洋子

たわわなる猷穀の穂や涼新た  
昇りつめこの先は無し牽牛花  
新涼や乙女の衿もと風通る  
新涼や鉢巻きを解く夫の背な  
秋晴れや父の面会に母と行く

若狭 松村笑風

新涼や墨絵に残る余白かな  
妹に譲る朝顔ピンク色  
去り際のハグのやはらか牽牛花  
宮廷の女官の栄華紺朝顔  
萩の戸を開け産土の敬老会

大阪 遠藤人美

丁寧に暮らす友あり秋涼し  
敬老の日会ひたき人に会ひに行く  
新涼や長袖シャツでウォーキング  
外つ国の争ひよそに秋涼し  
一鉢の朝顔生け垣に忘れられ

東京 畑宮栄子



朝顔や山の水引く杜家の庭  
江戸紫の朝顔咲かせ末寺守る  
朝顔にすれすれ一番電車過ぐ  
新涼や子役の口上凜と張り  
発止と打つ気魄の王手秋涼し

和歌山 十倉和子

涼新た雲を突き抜く富士の山  
新涼の丘に祝ひの鐘の鳴る  
朝顔の薄き色にも強さあり  
朝顔の数を数へて登園す  
会釈の子一期一会の秋の海

所沢 飯室夏江

涼新た雫のやうなイヤリング  
新涼の葉ずれ聞きつつ露天の湯  
牽牛花紋りを解きて彩競ふ  
友逝けり朝顔の紺深すぎて  
会席料理まつたけの香に箸躍る

さいたま 熊倉千重子

登山路は向う岸なり牽牛花  
紋りたる藍解き放ち牽牛花  
秋涼し難所を登る喜寿の夫  
新涼やベリーショートの細き首  
狗尾草昔の我に会ひみたし

さいたま 前田夏野

秋涼し活力戻る一日かな  
新涼や明日に備ふる外出着  
寄る辺なき朝顔一花風に揺る  
遅れ咲く小さき朝顔夕間暮  
会心の友の笑顔や涼新た

宮崎チアキ

秋涼し魚まるごと捌きけり  
会釈してすれ違ふ女秋涼し  
新涼やおでこの皺の弛むかな  
世界情勢変ることなく涼新た  
新涼や遙かに海のかすむ墓

流山 日吉亜弥子

シャルドネのグラス傾け涼新た  
秋涼し二杯目からの湯割かな  
朝顔や一つ萎んでひとつ咲く  
反り腰のラッパの如き牽牛花  
再会はラセラセラの俣武多かな

平野 楽

新涼やずんずん進む庭仕事  
全身で新涼の風受け止めて  
朝顔で西窓みごと覆ひけり  
紅葉狩会津の沼と決定す  
都会に来て摩天楼部屋九月かな

さいたま 森下美智枝

朝顔やはだか電球揺れ止まず

さいたま

田中章嘉

秋涼し青葉の笛の聞こえけり

さいたま

小駒さち子

朝顔の絡みだしたる干竿に

新涼や二十四基の碑を巡る

会津来て飯盛山の夕紅葉

朝顔や絡み支へて上目指す

運動会騎馬に乗る子も女子生徒

朝顔の青のカーテンハーブ園

薄紙のさらりと揃ふ涼新た

朝顔の蕾右巻き蔓左

宮代

関谷多美子

新涼や醜き顔の魚旨し

庭いつぱいの瑠璃の朝顔子ら遊ぶ

湯呑み満つ急須ほとほと秋涼し

新涼や汝の前途に幸あれと

涼新た予約至難の天ぷら屋

涼新た夫の体調日々快復

粛々と入院準備秋涼し

十月や高校同期会通信

涼新た小さき空港の祈祷所

秋麗百年後にまた会はむ

東京

柳父はる

我が君の目覚めは遅し牽牛花

岡田芳春

涼新たひまごのゑくぼ親写し

新涼や八十路の母の習ひごと

秋涼し障子のやぶれいつのこと

パール之母のブラウス秋涼し

朝顔の大輪映えし紺の染

スラックス選ぶ女生徒涼新た

朝顔の宿題あはや登校日

新涼や今年の計は如何ならむ

再会の顔大人びて秋の空

和歌山

高橋満耶子

新涼の中禅寺湖の細波よ

会心の出来のリメイク秋の服

朝顔に元気をもらひ仕事場へ

着物屋の店先飾る朝顔よ

朝四時の水供ふるや涼新た

新涼や待合室の週刊誌

新涼やジグソーパズル完成す

朝顔やはびこる地面乾きをり

突然の会者定離の白露かな

秋涼し寝覚め良き日の夫の鼻歌

新涼や行合ひの空昏れ初むる  
父のもの漸く似合ひ秋涼し  
新涼や川えびの背の透き通る  
朝顔やはるか秩父の空の色  
信号の向かうの会釈涼新た

さいたま 森 和子

新涼の風になびくや日章旗  
新涼や国道を行くコンバイン  
主なき庭の朝顔青い海  
朝顔や介護施設の消火栓  
都会の満月よこぎる異星人

さいたま 樋口元美

物語るバリトンの声秋涼し  
新涼や女子野球部のホームラン  
朝顔や白き花心のありてこそ  
朝顔や無住の垣を咲き登る  
秋麗の会津の城はなほ白し

横山礼子

秋の夜の果てなく続く同期会  
狭庭への足繁くなり涼新た  
朝顔や支へなくして咲き初むる  
朝顔の荒れ放題の庭に咲く  
ビル街の風新涼の匂ひ連れ

鈴木藻好

零余子飯句会の絆太くなり  
たくさんのてんぷら揚ぐる秋涼し  
味の濃きB級グルメ涼新た  
空青し新蕎麦打ちの体験会  
すれ違ふみんなに会釈大花野

内田恵子

ビル街の抜くる一風涼新た  
新涼や首のタオルがスカートに  
涼新た橋から見遣る隅田川  
秋一日はしやぐ八十路のクラス会  
朝顔や市かはきりに里巡り

武田重子

再会の君のスカート花芙蓉  
新涼の書架より選ぶ源氏かな  
新涼や朝の厨の水一杯  
友逝きて今咲き初むる牽牛花  
杖頼りの姉と会ふ日の菊日和

羽島秀子

秋涼し赤子のたてる笑ひ声  
秋涼しコーヒの香の流るる家  
貨物行く遠き鉄橋秋涼し  
透き通る夕日の色や涼新た  
突き抜けてどこまでも空涼新た

湯浅 和

二期期だ長袖シャツで涼新た  
朝顔のきれいに咲きて一年生遅刻  
朝顔と一年生の背くらべ  
同窓会やめどき決めて秋寒し  
会へばまた会ひたくなるや秋夕焼

さいたま 門真宏治

秋日和会の重なる展示会  
会欠席し佃煮届く敬老日  
朝顔や木に絡みつき見下ろせり  
生花店に珍らしピンク秋涼し  
マスクして献花の所作や秋涼し

和歌山 葛城千世子

牽牛花公民館の笑ひヨガ

石井直子

朝顔や年齢いへば驚かる

南條さわゑ

秋涼し隣の庭のバーベキュー

牽牛花隣家の境界見えづらし

蕎麦の花会津訛りの添乗員

新涼やクイズ出す手に万感こめ

柿日和赤べこ捜す町歩き

新涼や日々の散歩に今日新た

コスモスや里山ガイド募集中

新涼や見上げて歩く朝の月

新涼や健診結果ほぼセーフ

三浦真由美

新涼や山萩潜りゆく風か

さいたま 大熊道郎

田の上を風吹き渡り涼新た

書を枕吹く新涼の風淡し

朝顔や名札のついた植木鉢

朝顔の段々昇る花迷路

朝顔や江戸の名残の市の立つ

寝坊せり朝顔は早や打ち臥しぬ

記念樹の銀杏散るなり同窓会

年隔て煩惱失せて月見会

新涼や腹式呼吸を実感す

川島夕峰

新涼や只今畑の準備中

太田 貴

新涼や運命かけし二度目の会

山峡に分け入る線路涼新た

朝顔の色淡くして無限かな

朝空に朝顔たちのファンファーレ

朝顔や気分次第の朝の顔

故郷の友に会ひたし鱗雲

会員の減いづこも同じ秋茜

秋天に響き渡るや音楽会

新涼の丸太に憩ふ宮大工  
新涼や新書の帯に百万部  
新涼や早目に並ぶ手打蕎麦  
新涼や路上ライブを遠巻きに  
新涼やまつ毛の見ゆる空の色

さいたま 石関六弦

朝顔や垣根を越えて挨拶す

松下しょうご

朝顔や赤青黄色と七変化

鉢植ゑに牽牛花で生き返る

新涼や求め求めて北の国

川と土触れてみれば秋涼し

新涼や衿縦てやうか替へてみる

落合和枝

朝顔やラッパの如く朝開く

バンド会ステージ盛る秋の夜

秋涼し変はらぬ土手の口笛を

朝顔の蕾きりきり闇を裂く

大阪 飯塚智恵子

秋涼し追ひつ越されつ色ちがひ

特集 俳句と気象

巻頭エッセイ 尾池和夫  
エッセイ 菊地勝弘・井上泰至・若井新・鈴木太郎・太田かほり  
気象の秀句十句選 渡辺誠一郎・岩田由美・津川絵理子・大谷弘至

巻頭作品10句

鈴木真雄・すずき巴里・浅井民子  
戸恒東人・鹿又英一・藤本美和子  
正木ゆう子・木暮陶句郎

俳壇

12月号

11月14日発売  
定価1000円(税込)

巻頭エッセイ  
上野一孝

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句〔第Ⅳ期〕……島村 正・和田順子  
俳句の杜二〇二四―精選アンソロジー作家作品集  
特別作品30句……加藤かな文

季節の移ろい〜二十四節気……落合水尾  
俳人の住む町……高橋健文・山尾玉藻  
私の本棚・私の一冊……鈴木不意  
旧派の俳句……秋尾 敏

知つてるようで知らない俳句用語……井上泰至

俳句と随想12か月

石井いさお・宮谷昌代

本阿弥書店 〒101-0064 東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

# 俳誌望見 染谷風子

「河」 二〇二四年七月号 通巻七八八号

主宰 角川春樹 発行所 東京都荒川区

昭和三十二年十二月、東京都にて角川源義が創刊・主宰、角川照子の主宰を経て、平成十六年六月より角川春樹が主宰。

「魂の一行詩」をモットーとしている。

巻頭の主宰詠「ゆく春や」二〇句より五句。

花の夜のさびしき酒となりけり

ゆく春や生きるといふは出逢ふこと

とれたての詩歌に夏の立ちにけり

うぐひすの老いても詩歌を手放さず

泰山木の花は父の座照子の座

一句目、妖艶な夜桜の酒宴の果ての春愁。二句目、「八十二歳にして人生を省みれば」の前書あり。風雲児角川春樹の八十路越えに、正直筆者は驚愕した。三句目、四句目、作者の瑞瑞しい感性と、「老いても詩歌を手放さ」ないとする作者の詩歌に対する熱い情熱に筆者は感服。五句目、「河」を創刊した父、それを豊かに育てた前主宰への敬意の句。お二人は、香気を放つ白色大輪の、作者が仰ぎ見る泰山木の花だ。無鑑査同人句より五句。

如月や 眼圧計の風の音

副主宰 鎌田 俊

人の道少しはづれて汗疹爺 淵脇 護

韃靼に父捨てて来し黄砂降る 林 佑子

あはあはと夕日に溶けて花樗 小島 健

この角の先に画材屋ミモザ咲く 坂内佳禰

一句目、眼圧検査は機械からプシュッと空気を目の表面に吹きつけることで眼の圧力を測るものである。その緊張感と早春の如月との取合せが秀逸。二句目、「人の道少しはづれて」は「軟派修業」か。汗疹との取合せが諧謔。三句目、心象の造る詩の世界。まさに「魂の一行詩」である。四句目、上五中七の措辞に诗情あり。五句目、画材屋とミモザの取合せは五月のバリの街角を彷彿させる。

主宰選「銀河集」より共鳴句三句。

荷風忌やダンスシューズの履けぬ 松岡悦子

魚のごと花冷えの街漂へり 中西史子

ぐい飲みも銚子も備前洗ひ鯉 柴田和子

本号は、「河」全国大会二〇句競詠特集号で、選考経過と入賞者十名の作品が掲載されている。内共鳴句四句抽出。

討入りの日のトーストは餡バター 小野幸みち子

暖炉燃ゆ書架に帆船と地球儀と 田村恵子

冬晴れやこの町にもある富士見坂 関矢紀静

山茶花や白寿の伯母の薄化粧 高野悠子

入賞作品は有季定型・旧仮名、自身の身辺を新鮮な感性で詠んだ秀句に満ちている。俳誌「河」の益益の発展を庶幾う。

山本鬼之介 選

水明集

七夕や八十路過ぎしも夢吊るす  
たつた一枚短冊吊し星祭る  
ありし日の夫を偲ぶや桐一葉  
桐一葉はらりと落ちて嘘をつく  
近道選び通り抜くるや夏木立

さいたま 篠崎紀子

離れ家の佳人訪ふかに桐一葉  
俳聖の句碑によりそふ桐一葉  
桐一葉坂ゆるやかに母の墓  
古利根や雨のあがりし星祭  
天高しオリンピックの選手村

霜多光代

辻芸人の十八番端折らす秋の雷  
蹲踞をこぼるる水や処暑の夕  
夾竹桃盛る河口の潮どまり  
殉教の島に肅肅けふちくたう  
トレモロを爪弾く流し鳳仙花  
仏頭の割れ目に生ゆる夏の草  
石仏の深き衣紋や苔青し  
滴れる崖に彫られし阿弥陀かな  
うすれたる梵字に夕焼笠塔婆  
石敷の道は柳生へ五月闇

さいたま 池田瑠子

伊奈 菅原卓郎

夏の夜やとなりの門扉閉まる音  
ぼちぼちと仮設住宅能登の夏  
夾竹桃くづれ土塀を灯しをり  
標識の路肩に傾ぐ熱帯夜  
日南へサンフラワーの夏海路

清水桂子

星まつり願ひ事なき百寿かな  
七夕や秘むる願ひを墓場まで  
終戦の日や叔父を偲びて曲選ぶ  
桐一葉言つてはならぬ恨み言  
初秋の夜風にむせび咳ひとつ

新 暦文

おしろいや路地の仕立屋灯が点る  
新涼や古民家カフエの黒き梁  
菊の花咲かす余生や卒寿祝ぐ  
爽やかや揃ふ園児の鼓笛隊  
鱒雲溜池のある祖母の村

さいたま 岡田宣子

別荘地へヘッドライトへ火取虫  
七夕の笹竹担ぎ父帰る  
盆の月更湯の影となりにけり  
シエフの前菜枝豆のムースかな  
黄金色の田に日の陰り蝗群る

さいたま 小林京子

槍投の描く曲線秋の空  
盆波に椰子の実乗りて来たりけり  
落日や播磨屋橋の秋遍路  
盆波や揺れくり返す舳ひ船  
初秋や竹林の風招き入る

反町 修

無住寺の庭に人待つ爽竹桃  
去年の藁打ちて蛇づくり郷の秋  
千年を繋ぐ女よ処暑の夜  
処暑の風厨にとほし老夫婦  
山門をくぐる秋風伎芸天

越谷 阿部幸代

夏空や肩で風切る次男坊  
雪渓を過る影あり雲ひとつ  
四方から漫ろ歩きの夏の宵  
拙宅はこの路地奥よ半夏生  
玉葱の白瑞瑞し夕厨

寺町知子

団欒の部屋に切り込む火取虫  
やはらかな目覚めを誘ふ秋の蟬  
鳥唄や残る暑さを忍ぶ椽  
美しき切手購ふ秋めく日  
微笑みの遺影八月十五日

平塚 丸屋詠子

鳳仙花弾け靴音ひびく午後  
暖簾を揺らす風の来たるや秋近し  
太陽と同じ色して大南瓜  
縁側に南瓜ごろりと寝ころがり  
煌めきを掬ひたきかな星月夜

菅原真理

七夕や会はぬと決むる逢へぬ人  
桐一葉零れこの身の果てを待つ  
鈴虫のかそけき声や六義園  
都庁より夜景百選星月夜  
初秋や岬の先に光る海

さいたま 皆川更穂



閑かさや蟬時雨さく屋敷林  
黒塀に蔓伸ばしゆく青南瓜  
般若経やつと掲げて盆の門  
茄子の牛よゆつくり歩め二十日盆  
故郷や孤愁漂ふ罌雲

さいたま 加藤でん治

カップルでも家族でもなくゐる祭  
麦茶飲み次の出し物立ちて待つ  
よさこいのセンター背負ふ祭の子  
金神輿締めに通るは細き道  
光る龍ぐつたりと地に祭後

さいたま 吉川拓真

盆月夜虎のお泊まり四泊目  
夜叉の棲む沼よはらりと桐一葉  
今日は晴れ彼の日は曇り長崎忌  
下駄の音も胡弓もかなし風の盆  
フルトヴェングラーかけて在宅夜業人

森下山菜

トランプで占ふ恋や熱帯魚  
入居待つ戸建を跨ぐ二重虹  
夕虹や母子まどろむ授乳室  
鱈干し見つむる猫に一齣  
初秋の匙の重たき玉子粥

森 美枝子

盆波や消えぬ先祖の血の流れ  
湘南の黒き盆波砂さらふ  
白足袋や指に血豆の秋遍路  
丹波路に春日局栗拾ひ  
局長の祝辞かき消す蟬時雨

千坂平通

学生の手植ゑの青田すくすくと  
古代蓮咲き縄文人の声聞こゆ  
にはたづみ雲走りゆく梅雨晴間  
役目終へ梅雨の街ゆく救急車  
日輪や笑ひ止まらぬ氷菓店

杉戸 佐々木史女

日本勢磨きこまれた夏五輪  
次々と海空埋むる佐渡花火  
満開を誇らしげなる夾竹桃  
処暑の庭愛猫の背の反り加減  
浜に寄せくる波のささやき初秋かな

山岸久美子

過疎村を生きし秋蟬鳴きつのる  
寒村の篝火滾る曼珠沙華  
夫逝きてぼつり残す灯曼珠沙華  
空蟬を随に撫つる微風かな  
床の間に鬼灯ともる終夜

若狭 岡本祥子

剪定の常磐木抜くる風や処暑  
処暑の夕西空覆ふ茜雲  
客引の甘い誘ひや夾竹桃  
輩か木槿の垣の路地に消ゆ  
遊歩道大脱走のおほみみず

さいたま 飯田忠男

そこだけに風の生まれて青芒  
仕事師の片蔭求め昼休み  
安売りの曲り胡瓜を買ひにけり  
草いきれ其処に売地と札の立つ  
草むしり母の背中の丸み帯び

若狭 山崎郁子

雨上がり瞬間にしてつくつく法師  
限りある恋の行方やつくつくし  
袖捲り轆轤の渦や秋簾  
里帰り訛る挨拶秋簾  
床の間まで届く朝日や秋簾

緒方みき子

初蟬や祝詞に寝入る宮参り  
サングラス粋に外すや映画スター  
取的の四股踏む声の極暑かな  
式場のカサブランカの放つ香  
貼り紙の店主の逝去蟬しぐれ

さいたま 阿部貞代

閑取の乳房めぐりて汗拭ひ  
筒姫が蟬のファスナー下げて羽化  
空蟬の脱ぎつばなしや我が背子も  
月涼し満員バスに席を得て  
北斎の大波寄する夏の果

本橋稀香

女手の篤き願ひや星祭  
打ち捨つる木屑が宿や蠡斯  
鱒雲なほ色褪せぬ師の教へ  
嗟峨菊の溢るる科や永久の空  
菊咲くや門地は問はぬ学問所

秋谷風舎

シャンパンの泡は空へと星祭  
残暑なほ駝鳥は空を飛びたくて  
パソコンフリーズ蠡斯は鳴かず  
地下街のカフェのランプに蠡斯  
鳳仙花判子に紅き花個紋

綿引まりこ

ラグビー戦たれば論議果てし無く  
銀舍利に適ふ絶品寒卵  
散るを知りはたまた惜しむ里紅葉  
ちぐはぐも仕草の一つ阿波踊  
熱爛や旅の独りを染め上げて

香田裕誌

ひと度の潤沢の空星月夜

さいたま 竹澤和子

生き切りし母を見届け鳳仙花

潮騒乗せて夜行列車や星月夜  
一生に一度と思ふご来光

さいたま 小川洋子

水やりの襲来逃ぐる青蜥蜴

仕舞ひ忘れし種蒔けば咲く紅き花  
悔し紛れにその実を弾く鳳仙花

切り込みし包丁取られ大南瓜

加熱炉の風鈴作り恐るべし

子供山車爺も加はりエーイヤサー

火取虫山火事映す峰の雲

利根 倉田星歩

雷雲の連なり来るや天不穩

龍宮の舞姫かくや熱帯魚  
白南風にわが身を散らすさがり花  
イグアスの虹に切り入る遊覧機

石黒由美子

梵刹に異国の僧侶雨乞す

阿壇熱れ月桃紅き夏邸

バードバス喜雨の小波溢れ出づ

風に乗る箴うつ音や夏邸

星さやか星図取り出す夜の秋

武勇伝数持つ妣の魂送り

若狭 松村笑風

踊り手をしなで見分くる盆踊

海に散りし知覧の兵よ鱗雲  
三杯酢美濃の小鉢の黄菊かな

羽島秀子

語り部の眉間のしわや終戦日

雲海に浮かぶ天守や朝日影  
淡彩で描く安曇野秋涼し

刹那の恋今宵限りとちちろ鳴く

三枚に下ろす刃先や涼新た

台風やつむじ二個ある赤ん坊

わが項まとも火照るや処暑の夜

川口 新井のり子

本心を隠し入谷の盆仕度

菊活けて指先ほのか匂ひけり  
改札の大輪の菊市長賞

樋口元美

譲り合ひ流灯ゆつくりゆつくりと

鱗雲梯子を登るヒラメ筋

処暑の夜足を投げ出し長電話

鱗雲がながん喰る室外機

流灯や見送る人も風のなか

領海と月影守る巡視船

園庭につたなき文字の星迎  
きりぎりす昆虫好きの子を躲す  
軽トラや川音打消す夏の朝  
星今宵久しく会はぬ友のこと  
スライドに長き指示棒秋日和

さいたま 篠原さよ子

母逝きて広すぎる部屋冬の夜  
短日の空のほとりで妣とあふ  
帯よりも長き冬夜の白さかな  
日輪を訪ね細道冬の蝶  
掌のただ消ゆるまで細雪

所 沢 関根千恵

御巢鷹にあまたの御霊残暑かな  
御巢鷹へ隘路を辿る残暑かな  
秋暑し空回りする左脳かな  
枝豆や二品目までの間を持たす  
道問へば連れ立つ人や秋の風

木谷葉子

満天や南の島の星月夜  
枝折戸を開ければ弾く鳳仙花  
鳳仙花弾け嬰兒は眠るかな  
婿が加はり早く終はるや盆用意  
ご先祖様に南瓜とこんぶ一日目

さいたま 森下美智枝

見得を切りねぶた睨むや北の陣  
秋めくや空突き抜くる紙飛行機  
向日葵の立ち枯れ寂し昼の月  
肅々と芋虫渡る木陰道  
芋虫や「無農薬ゆゑ」店主笑む

伊藤美津子

停電の二分の長き残暑かな  
終点の車輛に一人残暑なる  
朝顔の種収むるリプトン紅茶缶  
枝豆やぼろり飛び出す胸の内  
無花果の葉陰に青き実のあまた

石井直子

十六夜の海辺に佇ちて深呼吸  
八十路にも浮沈のありて颯雲  
供華あまた呼び起さるる終戦日  
我が余生誇れるものに菊作り  
菊人形武者猛々と甦る

糸井しるく

地藏様残暑乗り切る意志強し  
老い同士残暑越ゆるか競ひ合ひ  
とりあへずビールとりあへず枝豆  
枝豆の薄皮むきでずんだ餅  
亡き友の在りし日想ひ萩手折る

門真宏治

ウオーキングの足元に在る残暑かな

さいたま 三浦真由美

へアカット短かめにする残暑かな

枝豆や指先までもしやぶりをり

下戸なれど枝豆の莢山として

秋の夜や机に高く「自由自在」

おしろいやロイド眼鏡の横に添ふ

吉川 杉浦千祐

千鳥足浮きぬ喜雨の夜祝の夜

喜雨にじゆつと鳴るや熱熱アスファルト

ドリフト族と灯虫乱舞す夜の埤頭

尽きし会話に灯虫の羽音峽の宿

抽選の外れし音よ秋の空

さいたま 石関六弦

秋澄むや能ある人のひとり言

秋の野へ猫背晒すや影法師

稲の花卒寿を越ゆる太郎冠者

鬼蜻蜒いつも自分で決めてきた

棚下に月見る親子安らけし

岡田芳春

河骨を生けて御仏迎へけり

へうきんな叔父あらはるる瓢箪

青瓢顔を描きたくなる丸み

おほなみのありても祖国天の川

巴里の空鰯雲突く槍一投

さいたま 横山礼子

鯖雲や耳切れ猫の腹ふくふく

鱗雲東尋坊の波が爆ず

白菊や祖母の着物の香を偲ぶ

人知れず菊のこぼるる奥座敷

出掛ければ猛暑猛暑の声したり

稲光いちにいさんと音を待つ

父の舟精霊流しの出番待つ

ミンミンとジージー蟬の大合唱

暑き夏舞台の上は紙吹雪

東京 桐山遊童

通り雨二重の虹を置きて去り

さいたま 穴戸洋子

逢ひたきと思ふ友あり秋初め

九十歳母は骨ごと鰯食ふ

水撒きのホース捻れて虹懸る

裾分けの野菜の匂ひ秋初め

庭先で線香火花淡き思慕

和歌山 嶋田洋子

登山道片手ですくふ命水

炎天下我が影ほどの耕しす

大鉢を貸切る金魚のたりかな

我が耳を終の棲家と決めし蟬

明暗の分かれし二人鳳仙花

さいたま

川島夕峰

警報解除水治まりて秋高し

長き夜警報解除のアナウンス

蝨斯きざなスーツに伊達眼鏡

水澄みて子供二人を追ふ河原

茜さす花野何故か別れ話に

敬老日卒寿の父のひげをそる

高飛びの名手なりや蝨斯

木道を交互にゆづる花野かな

トンネルの先の白波残暑かな

降りるか釣るか水路の底のざりがにを

横浜 石井妙子

教室に歓声 Amazon から目高

フルーツゼリー今朝の小言を忘れをり

汗かかぬ人体模型触つてみる

喪帰りや冷やし中華のハムの色

「かあちゃん」ともどりし子の手たでの花

さいたま

湯浅 和

甚平や父の緋の縫ひ直し

採りたての胡瓜の刺が指をさす

秋来る机上にどかと新刊書

今朝の秋母をいたはる寺参り

東京 畑宮栄子

朝顔や色水作る指まつ赤  
炎天や脳天じわりと溶けゆけり  
鉄鍋で焙るかのごとき酷暑かな  
彼の国の争ひ思ふ原爆忌  
扇風機頭ふりふり駄々こぬる

山下ユリ子

さいたま

小山あつ子

暮れ初むる黙の西空鰯雲  
露草や壊れかけたる道標  
稲妻やびくくんと猫のひげ  
魚群めく鰯雲朱に染まりゆく  
盆踊つとくちずさぶ東京音頭

海神の怒りて地震やこの葉月

前田夏野

初秋の日財布の中に笛ひとつ

小町の湯上がり一献菊膾

鰯雲溪谷渡り広がれり

鰯雲湧く中へ空へトロッコや

待ち侘びて迷ふ五杯目熱帯魚

上尾

室井早都子

大作を読破の余韻虹二重

親潮にもまれ鰯の丸き腹

初秋や夕日とろとろ信濃川

初秋や夜らしいの雨の置き土産

果樹園の農家訪ふ道蟬時雨  
雷鳴のふいに轟き真夜目覚む  
盆休暇駅銘店は長蛇の列  
夏夕雲解決の道仄と見え  
様々な事重なりて今夏逝く

宮代 関谷多美子

一粒の糧の旨味や涼新た  
盆の波我が本復の兆しかな  
秋麗お握りだきて池に鯉  
托鉢の揺るる瓢箪涼新た  
浮き浮きと紐とく荷物秋涼し

さいたま 鈴木香音子

誰ならん秋の日暮前に香を聞く  
雷雨舞ひ豁然裂くる老桜樹  
雷や三味に胡弓の風の盆  
書を枕新涼に吹く風淡し  
雨上り蟬鳴く闇は膨らみて

さいたま 大熊道郎

影追ふや真すぐの道夏木立  
夕立来る突つ走る奴二三人  
白鷺の動かぬ姿池の面  
極暑中人氣絶えたる街の景  
物憂げに白さるすべりゆれてをり

東京 柳父はる

お隣は挨拶もなく秋簾  
お薦めのカフェは古民家秋簾  
境内に夕刻の主法師蟬  
バスツアー一期一会やつくつくし  
樹木葬一瞬風て法師蟬

所沢 飯室夏江

大海へライター放り投げ晩夏  
大空を焦がれてないで飛べぶんぶん  
詫び言はぬままに日が暮れ花芙蓉  
山を行く笑ひ上戸よ通草の実  
「腹巻」は祖母の遺言風天忌

大阪 遠藤人美

掃除機をかけてほどなくどつと汗  
汗の身に心地よきこと夜の風  
砂浜を夫と歩くや夏の朝  
帰宅後の砂糖多目の氷菓かな  
帰省子のまづ仏壇に手を合はす

さいたま 高原和子

田の道やついて蜻蛉の物見番  
秋茜低く高くに雲流る  
道標孤高のやんま羽休め  
薄雲に光を灯し盆の月  
仰ぐ目にここにいろよと盆の月

東京 山中いちい

秋暑し庭の茄子の空元氣

さいたま 駒谷行雄

余命十日土中恋しと蟬は鳴く

醉芙蓉あのお転婆が成人に  
俺は俺勝手気ままに酔芙蓉

さいたま 鈴木藻好

振花はこんな所がよく似合ふ

色渋き夫のネクタイ秋めきて  
飲み友の誘ひは屋台秋めきぬ

採りきたる唐黍チンして味談議

屋根叩くドラムソ口とも聞く雷雨

流星を数ふる二人土手の上

取り敢へず間髪入れぬビールかな

平野 楽

新盆や少しきつめの腕時計

播磨 進

炎昼や校庭横で蛇口飲み

異国の地七日目を過ぎ夜の秋

炎昼やらくだの棲める砂丘踏む

秋夕焼ベルンを囲むアール川

炎昼やボード踏みしめ風を受く

天高しラインとドナウの分水嶺  
片膝を立てて爪切る敗戦日

泣き泣きてたまねぎ切りのせいにする

子の寝言猫の寝息や団扇風

大熊健司

和歌山 南條さわゑ

打水を躲す少年けんけんば

蟬一夜我が家の植木宿とせり  
蟬持ちて飛ばせば遙か彼方へと

クロワッサンのバター芳し今朝の秋

通草取り籠一杯になりけり  
甘藷料理の幅を広げたし

酒二合本音つると衣被

現の証拠空き田一つばい伸びにけり

後継ぎは平成生まれ新豆腐

日盛りや荷物両の手背はリュック

武田重子

重機浮く脇河川敷とんぼ飛ぶ  
滑り台寝転ぶ爺にとんぼ去る

東京 深沢りこ

丸ごとの胡瓜をがぶり畑作業

甚平の集ふ緑台男衆

首曲げて何を思案の鷺一羽  
老健の脇伸びゆくや夾竹桃

自転車の籠に投げ込む蓼の花

竜舌蘭空突くごとく開花せり

くさはらのポーズの少女赤のまま



新涼や一番檜の大漁旗

へうたんはなにはの夢を食べ尽くし

新涼は蒼き海からひたひたと

青瓢なにはの夢の軽さかな

終戦日全てを捨てた無条件

台風の子報にからず雲隠れ

人住まぬ家の前にも迎火や

台風や竿取り込みに息子来る

ギリシャ旅夏の休みをしめくくる

独り居の夜の地震や寝たまんま

緑蔭を探し探して犬とゆく

大南瓜とどきレシビのあれやこれ

八月の多くの祈りどこへゆく

揚花火園児となりし幼な子に

立秋や少女の髪の紅リボン

紫の花香り立つ今朝の秋

衣被長幼の序の在りどころ

秋立つや山容の景筑波山

芋虫を助けし礼か揚羽舞ふ

秋めいて千曲の果実届きたり

秋めくや義母を偲びて一句詠み

秋めいて手負ひの選手勝利せり

草加 持永喜夫

藤沢 小島喜代子

鬼石 榊原聰子

さいたま 落合和枝

榎本道代

# 俳句

## 12月号 予告

11月25日発売

予価1,100円(本体1,000円)※

巻頭作品50句 小川軽舟  
作品21句 伊藤伊那男・石田郷子

### 没後20年 田中裕明

句集未収録作品を読む

#### 人物特集

『山信』花間一壺『櫻姫譚』先生から手紙『夜の客人』各拾遺／『夜の形式』を読む／なぜ田中裕明か はじめての田中裕明20句／ティープな裕明20句

#### 採録 対談 日本語の美学

星野高士×金田一秀穂

第70回 角川俳句賞 受賞後第一作 21句 若杉朋哉

句集特集 日本の俳人100 広渡敬雄『風紋』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。  
発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 作品鑑賞

## 山本鬼之介

桐一葉はらりと落ちて嘘をつく 篠崎紀子

季語の「桐一葉」については、複数の歳時記や関連の書物に、中国の古典から発した「大きな木の葉が落ちる姿に秋の季節感を感じ付けた（一葉）」が、日本の和歌や連歌へ、そして俳諧から俳句へと受け継がれてきた経緯が書かれている。「一葉」の「葉」は「桐」であると「桐一葉」が季語として定着したのは近代俳句になってからのようで、それには、坪内逍遙の戯曲『桐一葉』が影響していると言われている。しかし、松尾芭蕉が座右に置いていた季語集『増山（増）の井』には、「一葉は桐なり」と、「桐一葉」に限定されていて、芭蕉の句に「我宿の淋しさおもへ桐一葉」がある。

ついつい請売りの事柄を書いってしまったが、この歴史的背景のある格調高い季語を使いながらも解説困難な掲句に惹かれたのは何故なのだろう。句意は二つに分かれる。その一は、嘘をついたのは作者、その二は、地に落下した桐の葉である。たしかに、大形掌状の桐の葉がはらはら舞ながら地に落ちる

景色は、秋という季節感を一層引き立てるものであろうし、その葉を拾い上げた人の感情もよりセンチメンタルになるのではないかと思う。作者も何かの折に桐の葉の落ちるのに遭遇し、落ちた葉を拾って裏表を観察したが、何ら感傷的な気持は生まれず、桐の葉に「いない いない ばあ」をされたような気がした。嘘吐きは桐の葉である。

桐一葉坂ゆるやかに母の墓 霜多光代

この句に書かれている「母の墓」が、実在のものか仮想のものなのかは不明であるが、実に快い響きを持った俳句である。緩やかな上りの山裾にある先祖の墓所。その山を含めて周辺の土地一帯が旧家の持ち物で、四季折々の風情を楽しみながら墓参ができる。今は秋、だから坂の途中にある桐の木から、時折大きな葉が落ちてくる。まるで墓に眠っている仏様が、「よく参ってくれたね」と言っているように。中七の措辞が、上五と下五を繋いで秋景色を演出しつつ、人の動きまでも描き出している。

蹲踞をこぼるる水や処暑の夕 菅原卓郎

二十四節気の一つである「処暑」は、「残暑がおさまる」という意味であるから、茶室のある庭に設えられた蹲踞から「こぼれ落ちる水」と「処暑の夕」が快く響き合っている。だが、

現実問題として、近年の気候変動の激しさは、処暑はもちろん残暑という言葉さえも無にしてしまっている。そんなことは百も承知で、昔ながらの季語を一句に仕立て、心の中で処暑の気分を味わっている作者の心延えが実に爽やかである。

仏頭の割れ目に生ゆる夏の草 池田瑠子

「仏頭の割れ目」によって野にある石仏であることが明らかで、同時に夏草の繁殖力の旺盛さがよく見える俳句である。永年の風雨や雪に苛まれ、顔貌も定かでない野の石仏の哀れさが、罅割れた頭から生え出た夏草によって極限に達している。そのリアルさを、目を逸らさずに詠んだ作者の詩心がよろしい。

日南へサンフラワーの夏海路 清水桂子

本句の「サンフラワー」は、「商船三井さんふらわあ」が運行している豪華フェリーのブランド名であり、その白壁の船体には「大輪の花のような光を放つ朝日が水平線から昇ってきたような鮮やかな絵」が大きく描かれている。

作者が以前ご夫君と宮崎県の日南へデラックスな船旅をされた時の想い出だと推察する。瀟洒な船室の丸窓から眺める夏の青空と碧い海に時を忘れ、そして、デッキに出れば海鳥や海面を切って泳ぐ魚群に出会って大燥ぎした。「夏海路」

の一言が、筆舌に尽くせぬ素晴らしい想い出を伝えている。

星まつり願ひ事なき百寿かな 新 暦文

百寿という言葉は辞書には載っていないが、卒寿の上の百歳の賀の祝であろう。一九九〇年代に百歳を超えても元気で日本の国民的人気者となった「きんさん・ぎんさん」の双子姉妹がいた。その頃から更に平均寿命が延びた現今では、百歳を超える人が増えてはいるものの、元気な状態で百歳を迎えるのは現実問題としてなかなか難しいことだと思ふ。

七夕の日に、大勢の親族が百寿の人を囲み、それぞれが短冊に書いたお祝のメッセージを読み上げて笹竹に吊してゆく。最後に、百寿の当人に短冊が渡されたが、ただにこにこ笑みを浮かべてゆつくり首を振るだけであった。充分満足のゆく人生であったのだろう。

おしろいや路地の仕立屋灯が点る 岡田宣子

季語「おしろい」は「白粉花」の傍題であるが、その他に「夕化粧」という筆者好みの艶っぽい傍題もある。

おしろいが咲き始める頃、路地の奥にある小体な家に灯が点った。「御仕立いたします」と小さな立て看板が扉の袖に掛かっている。有名なテーラーで働いていた人が独立し、自宅でテーラーメイドの洋服を仕立てている。定年など関係な

く、目と手に狂いが生じない間は、自分に合ったペースで注文を請け、人生を全うする仕事を続けるのであろう。

盆波に椰子の実乗りて来たりけり 反町 修

歳時記によると、「盆波」は、孟蘭盆会の頃に太平洋側などの南方海上に発生して発達した台風の影響による高波であると説明されている。この解説文によって、南方の椰子の実と孟蘭盆の異質な取合せが納得できた。この俳句を読んで、島崎藤村作詞の歌『椰子の実』の「名も知らぬ 遠き島より流れ寄る 椰子の実一つ」の歌詞が浮かんできた。

拙宅はこの路地奥よ半夏生 寺町知子

閑静な住宅街のとある路地の角の家に、いま半夏生草が、小さく白い花を沢山咲かせている。同伴者とその家の前まで来て、「私の家はこの路地の奥ですよ」と指し示している。拙宅という謙譲語と季語の半夏生によって、簡潔にその場の情景を伝えている。

太陽と同じ色して大南瓜 菅原真理

真夏の陽をいっぱい吸収して逞しく蔓を伸ばし、秋になって見事な実をつける。眩しい太陽のような色と言うから、表面が平滑で肉質が硬く、びっくりするほど大きくなる西洋南

瓜であろう。そのような南瓜が、畑にごろごろしていたらさぞかし壮観であろう。ほくほくして美味い栗南瓜である。

シェフの前菜枝豆のムースかな 小林京子

作者が最良の佛蘭西料理店のシェフが腕に縊りを掛けてくった逸品である。ビールの手軽なつまみとして定着している枝豆が、見る見るその姿を変えて洒落た前菜になった。淡いグリーンのムースに莢から取り出した枝豆をトッピングした前菜に、これからつづく料理に期待が盛り上がる。

山門をくぐる秋風伎芸天 阿部幸代

伎芸天は、大自在天にシヴァ神の髪が生え際から誕生した天女と言われており、容姿端麗で器楽の伎芸が抜群、伎芸修得福徳円満の神とされている。奈良市の秋篠寺に安置されている「木造伎芸天立像」が有名で、写真で観てもその優美な姿に魅了される。

秋篠寺の枯淡の山門を通り抜ける秋風は、伎芸天に季節の到来を告げるのであろうか。

島唄や残る暑さを忍ぶ椽 丸屋詠子

島唄は、奄美や沖縄などの南西諸島の民謡で、琉球の音階に則り、三線（さんしん）や太鼓などの伴奏で唄われる。沖

縄本島周辺には風光明媚な島々が沢山あり、石垣島・竹富島・久米島・宮古島・伊良部島など、多くの観光客が訪れる。

素朴なシーサーを赤瓦の屋根に載せた家の椽で、日焼け顔の古老が、残暑の夜に月を仰ぎ、三線を弾きながら島唄を唄っている。心に染み入る唄である。

初秋や岬の先に光る海 皆川更穂

小高い丘に佇み眼下に広がる半島の景色に目を遊ばせている。目を転じてゆくと、彼方にちらっと見える海が、自分に語りかけるように光っている。まだ気温は高いが、吹き渡る風には秋の気配を感じる。

閑かさや蟬時雨きく屋敷林 加藤でん治

地方都市にある旧家の屋敷の周りを囲む屋敷林を想像する。屋敷林の主な目的は、台風・季節風・地域風などの防風の他に、積雪の多いところでは防雪の目的もあるようだ。植えられている木はいろいろあるが、常緑広葉樹が多いとのこと。

邸宅に大家族時代の面影は無く、今は家人も少なくひっそりとしているので、周りの木々から湧き出てくる蟬時雨が凄まじい。屋敷内とは対照的な世界である。

下駄の音も胡弓もかなし風の盆 森下山菜

三味線と胡弓と太鼓の伴奏で唄う「越中おわら節」で、三日間夜を徹して八尾の町を踊り歩く「おわら風の盆まつり」である。踊り手の履物は男女ともに草履であるから、この句に書かれている下駄は見物している人の、それも、女性の下駄であろう。もの悲しい胡弓の音と合わせて考えると、悲恋に痛む顔を伏せて、まつりの群衆から離れてゆく若い女性の下駄の音を思い描く。

局長の祝辞かき消す蟬時雨 千坂平通

「局長」と言っても、中央省庁の局長や、地方行政の局長、郵便局や水道局などの局長と、いろいろの部署の局長があるので特定し難いが、何れにしても、局長が祝辞を述べている場所は樹木の多い屋外で、蟬時雨のためにマイクを使っても声が掻き消され、苛立つ局長の様子が伝わってくる。

浜に寄せる波のささやき初秋かな 山岸久美子

気象変動が激しい近年において、「初秋」という季節感を把握するのは難しいが、作者が盂蘭盆を過ぎた頃の或る日の朝、浜辺を散歩していて、浜に寄せてくる波の優しさに季節の移り変わりを感じたのである。中七の「波のささやき」がその時の作者の心の内を表している。

## 水琴窟 (水明集九月号鑑賞)

池田雅夫

寄り添ひて秋刀魚焼きる老夫婦 香田裕誌

典型的な庶民の暮らしを詠んでいるものの、近年、「秋刀魚」が不漁で値が高くなっているのが気にかかる。かなり年配の「老夫婦」であろう。仲が良くて「寄り添ひて」ならばいいのだが、どちらかの手助けが必要な場合も考えられる。

正直にいつか話さう夏の雲 森下美智枝

誰にでも内緒ごとや嘘があるものだが、いつまでも隠しておせるはずもなく、「正直にいつか話さう」と意を決したのだろう。見上げる空には絵に描いたような「夏の雲」が浮かんでいる。素直になれた心境が夏の雲に投影されている。

気だるげに猫が行くなり日の盛り 蛭田律子

犬ばかりでなく猫でさえ、この暑さは耐えられない。もの陰を伝いゆく猫の「気だるげに」歩いてゆく猫の姿を見ている。その本人も「日の盛り」の気だるさを感じているのだ。

ぼうふりや山門はたの手水鉢 小山あつ子

「ぼうふり」は蚊の幼虫「ぼうふら(子子)」のこと。ひつ

そりとした山寺であろう。山門の脇に設けられた古い「手水鉢」。久しく使われていないので子子が湧いてしまった。憎たらしい子子も句に詠まれると憐れに思えるから不思議。

田んぼ道蛇しゆるしゆると横断す 松村笑風

都会ではほとんど見かけなくなった蛇。一方、田園の広がる郊外などでは蛇も珍しくない。田植えが済んだ農道を横断する「蛇」。「しゆるしゆる」と素早く動く姿を滑稽に詠んでいる。嫌われものの蛇にも親しみが湧いてくる。

夕風のしまなみ海道ひとり行く 門真宏治

中国地方と四国を結ぶ瀬戸内海の橋の連なる「しまなみ海道」。頻繁にかよう船を眼下に「夕風」のむし暑い中を一人旅。瀬戸内の夕風はとくにはなほだしいという。雄大な自然の中に吸い込まれ、この先の旅の期待が大きくふくらむ。

空き瓶に薔薇が一本駐在所 大熊健司

駅前の繁華街から少し離れた住宅街の「駐在所」であろう。交番とちがい、駐在所に暮らす警察官が常駐している。殺風景な駐在所に置かれた一本の薔薇が地域の安全を願っている。



梅雨晴の氷川の鳥居天を突く

穴戸洋子

ドーナツの真ん中通る薄暑光

平野 楽

関東屈指の「氷川神社」である。長い参道と歴史ある境内に隣接する公園の森は市民の憩いの場でもある。はげしい梅雨も峠を越し、抜けるような「梅雨晴」の一日である。茂る樹々とともに天を衝く「鳥居」がどっしりと構えている。

古民家の縁にぼつんと螢籠

南條さわゑ

子つばめの糞のひと山小雨降る

榊原聰子

のどかな山村の原風景を見ているようだ。老夫婦だけの暮らしであるが休日には街の子等がやってくる。孫と一緒に螢狩をしたのだろう。子等が帰ったあとには「縁にぼつんと螢籠」が置いてあった。再び「古民家」の二人にもどった。

目の合うて狼狽ふる妻青蜥蜴

鈴木藻好

夕風やコンピナートのシルエット

三浦真由美

庭の花壇の手入れをしている妻。無心に作業していると、目の前にチヨロチヨロと動くもの。「青蜥蜴」である。突然のありさまに「目の合うて狼狽ふる妻」の驚きようが目にくがぶ。青ざめた妻と蜥蜴の青を係けるには無理があるうか。

蕎麦打のこねる手触り梅雨湿り

石井直子

梅雨最中こはれし傘の捨てどころ

山下ユリ子

近年、趣味で「蕎麦打」を行なう人が多くなっている。蕎麦打は天候や気温、湿度によって微妙に影響するという。その水加減で蕎麦のできが決まる。蕎麦打名人かも知れない。

最近の「梅雨」は夕立のように集中的に強く降る傾向にある。風を伴う雨に傘が「こはれ」てしまった。「捨てどころ」には、捨てる場所と時期の二通りの意味があり、さて。

大村節代 選

鼓  
笛  
集

秋うらら関八州を見晴るかす  
爽やかや松籟撫づる関所跡  
マドンナに遇ひてときめく秋祭

反町 修

迂闊にも切れ字重ねし残暑かな  
立ち読みの新書の帯や秋の空  
独り身を通す女将や秋裕

森美枝子

色付ける谷を映して秋の川  
ゆらゆらと水底近し秋の川  
魚跳ね谷静かなり秋の川

小林京子

碇泊のしづもる入江深き海霧  
水琴窟の音が迎ふる霧の宿  
霧流れはるか広ぐる山の裾

岡田宣子

蒼天の智恵子の空に赤蜻蛉  
嫁に出し涙で見上ぐ鰯雲  
街灯の息づき消ゆる野分け後

新 曆文

黒牛の山塩なむる良夜かな  
先人の旅路なぞるや菊膾  
廃校に寄する野風や白桔梗

菅原卓郎

星祭特選の句を天辺に  
返信の文書く夏至の窓辺かな  
新宿の残暑見てゐるへりコプター

綿引まりこ

秋桜右に左にお世辞せり  
突き抜ける青空の下曼珠沙華  
選句され句会愉しき秋の路

千坂平通



今日だけの嫁に戻りて盆用意  
棚行やモーターバイクにスニーカー  
茄子の馬偲び心を子と分かち

池田珪子

夫逝きぬ友の笑顔や吾亦紅  
赤とんぼ追へばジェット機雲に消ゆ  
コーヒーカップの横にほほづき妹の忌

杉浦千祐

胡弓泣き三味弾き流す秋祭  
ホルン吹くチロル山峡の村祭  
道化師の笛に魅入られ村祭

北山建治郎

見つむれば見つめ返さる水の秋  
スーパ一の棚の遊べる雨月かな  
焼栗の御負けに肥ゆる紙袋

遠藤人美

澄みわたる秋風地上満しをり  
秋空に無垢なる児らの幸祈る  
豊かなる稲穂に人の智慧のあり

山岸久美子

星飛ぶや乗つて行きたし夫の元  
竹箒音為す寺の白芙蓉  
割烹の皿の一色蓼の花

武田重子

撫子や童女止まれば吾も止まり  
内と外虫鳴くさとの庵かな  
名月に胸中もらす遊歩道

加藤でん治

秋蟬や風づてに聞く透る声  
饒舌の店主さし出す釣りと梨  
時忘れ舞のおさらひ秋の蝶

篠原さよ子

故郷の茱萸摘む向かふ鰯雲  
鰯雲飛行機雲に追ひ越さる  
畦道に腰を下して鰯雲

飯田忠男

☆

☆

大漁旗指さす先に鰯雲  
細長く垂るる花弁友の菊  
欠かさずに飾る小菊や母思ふ

小駒さち子

## 鼓笛集作品評

大村 節代

マドンナに遇ひてときめく秋祭

反町 修

故郷の秋祭に同窓会をかねて集まる事となった。高校時代の、皆のあこがれのマドンナも出席するという。気のせいか今年は出席者が多く、男子の出席率が良いと幹事が喜んでいゝ。当日は同窓会が終り、盆踊りが始まると、青春に戻ったようにマドンナを囲んで皆踊っている。ソーレ。

独り身を通す女将や秋祭

森美 枝子

期せずして秋祭が二つ並んだ。この句の女将は先代からの旅館か店舗を守って、仕事に心血を注ぐ女性なのだろう。

秋祭で遊び疲れた客がどっと立ち寄ると、過不足なく持てなす女将の心意気が伝わる。

ゆらゆらと水底近し秋の川

小林 京子

取立てて難しい事を言っていない。しかし、水底の揺らぎが心に迫る。見上げれば本当にここに秋がある。空がある。智恵子の空がある。銜いのないやさしい句。

鼓笛集巻頭（十月号）

私の好きな一句（自句自解）

阿部 幸代

覚めやらぬキャラメル工場初日の出

私の故郷は栃木県小山市。駅の東側には工場が立ち並んでいました。その中の一つがM製菓で、毎日のように、キャラメルの甘い匂いが漂ってきました。

小学五年生か六年生のとき、日の出・日の入りの観察が宿題に出され、私は迷うことなく、駅の跨線橋から見えるM製菓の煙突を定点として、観察を続けました。初日の出も、このときに観たのです。

# 句集喝采

菅原卓郎

## ◆粉川伊賀「草の花」

文學の森

著者略歴 昭和二十四年久喜市生。昭和五十三年落合水尾主宰「浮野」入会。昭和六十二年浮野谷川賞受賞。平成二十五年。令和二年埼玉文芸賞準賞受賞。「浮野」同人。俳人協会会員。

高校の英語教師であった作者の第四句集。軽井沢に山荘を持ち、句作と家庭との触れ合いを大切に行っている。

蚊遣 香地藏にこころ寄する宵

榎火焚くもつと孤独に浸るため

昂るは水のみならず雪解沢

敬老日長生きといふ愛ひとつ

きさらぎの野は復活の気に満つる

第二句、暖炉にくべる榎の火をこよなく愛し、季語の榎火の句も多い。じっくりと燃える榎の火をただただ眺め、至極の孤独を楽しんでいる。第五句、陽暦の三月ともなれば、野の草花は満を持して復活の春を待つ。

採点の机上にひとつ福みかん

人日の庭に反古焚く夕べかな

いつもの野いつもの道の草の花

かな女忌の近づく月の円かなる

第一句、高校教師である作者の生徒への愛が窺える一句。点数が気になる。第三句、句集名の句で、何気ない景である

が、美は日常にあると教えられ、咲いて枯れるまで誰も気にも留めないかも知れないが、立派に咲いたのを見届けた作者の気持ちが込められた一句。

## ◆広渡敬雄「風紋」

角川書店

著者略歴 昭和二十六年福岡県生。平成二年「沖」入会・能村登四郎に師事。平成二十四年第五十八回角川俳句賞受賞。平成二十五年「塔の会」会員。俳人協会幹事。

作者の第四句集。風紋とは風的作用による砂の模様のある。古希を過ぎた作者が日本の原風景を懐かしむ作品が見受けられ、オソドックスな作風で纏められている。

風紋は沖よりのふみ夕千鳥

逃ぐるたび砂新しき蟻地獄

竜天に登るや竹生島残し

星涼シアンモナイトの渦の芯

第一句、風紋には津波で犠牲になられた方々を含め、冥界からの知らせだと捉えた作者の思いが込められている。第三句、神仏一体となった竹生島、西国三十三所の第三十番目の札所。竜神が金銀珠玉を捧げたとの謂われの有る島だ。正に竜が残した神秘の島である。

二の腕に青きタトゥーや巴里祭

献杯は眉の高さに小鳥来る

煮凝や女盛り頃の餅の母

四人目も女勤りけり柏餅

乳牛の乳房勤労感謝の日

第二句、献杯は頭上高々には交わさない。その控え目な仕草と季語との斡旋が見事。第四句、めでたき第四子女の誕生。端午の節句の柏餅は賑わし甘かった事であるう。

網野月を選

山紫集

街に来て道にまよふ子鰯雲

池田雅夫

渋滞に他県ナンバー鰯雲

篠原さよ子

鰯雲つい密航を企つる

内田恵子

復旧せし赤き鉄橋いわし雲

石川理恵

鰯雲そろそろ部屋の模様替へ

野口和子

気がかりもなるやうになる鰯雲

山中いちい

犇めきて競ふ気球や鰯雲

青木鶴城

遺伝子の螺旋の如き鰯雲

石関六弦

マーチング指揮杖の先鰯雲

原田秀子

プリズムに透ける虚空の鰯雲

菅原卓郎

安達太良の空に智恵子や鰯雲

加藤でん治

鰯雲大漁節が聞える

上戸千津子

繊細な心持ちたや鰯雲

川島夕峰

カーナビの声に誘はれ鰯雲

熊倉千重子

大仏の手の平越しに鰯雲

倉田星歩

鰯雲千切れてぱいと独り旅

河野はるみ

地図にある町地図にない川鰯雲

小林京子

——以上特選

|               |       |              |       |
|---------------|-------|--------------|-------|
| うろこ雲太公望の竿の浮き  | 近藤徹平  | 月光に眠り覚ますや鰯雲  | 杉浦千祐  |
| 電線の混みあふ空に鰯雲   | 小山あつ子 | 雲場池に収まり切れぬ鰯雲 | 鈴木藻好  |
| 先達のあの日の俳句鰯雲   | 榎原聰子  | 校庭の百葉箱や鰯雲    | 鈴木玲子  |
| 球を蹴る少年ひとり鰯雲   | 佐々木史女 | 高々と淡色朝の鰯雲    | 関谷多美子 |
| 鯖雲や応援団の声そろふ   | 笹本啓子  | 小海線ほぼ無人駅鰯雲   | 瀬戸雄二郎 |
| 軟弱な男が好きな鰯雲    | 篠崎紀子  | 十号のカンバス狭し鰯雲  | 染谷風子  |
| いわし雲銚子に躍る大漁旗  | 渋谷きいち | 草枕茜に染まる鰯雲    | 反町 修  |
| 鰯雲戦後の暮しに思ひ馳せ  | 嶋田洋子  | 鰯雲城のお堀へ降り立ちぬ | 高橋満耶子 |
| 眺望良きバルコ十階鰯雲   | 清水桂子  | 鰯雲大群集の野外劇    | 武田重子  |
| 復元の縄文住居いわし雲   | 下川光子  | 釣堀にゆつくり流れ鰯雲  | 田中章嘉  |
| つなく手に別るる予感鰯雲  | 霜多光代  | 長期休暇終はる兆しや鰯雲 | 寺内洋子  |
| 里帰りの子らみな去ぬや鰯雲 | 菅原真理  | 銭湯の煙突どこへ鰯雲   | 寺町知子  |

鰯雲事の成就を見届けに

飛永 鼓

たれかれの揺らす吊橋鰯雲

正木萬蝶

鰯雲地震防災心して

南條きわゑ

大拳して山を曳くがに鰯雲

松井由紀子

太平の空が似合ふよ鰯雲

西幅公子

鳥羽と言ふ狭き谷にも鰯雲

松宮保人

鰯雲我慢しなくていいよ泣け

野田静香

寂静や天は黄金に鰯雲

丸屋詠子

只見湖へ峠を越えて鰯雲

野村美子

深呼吸の空呑む勢ひ鰯雲

丸山マスマ

鰯雲寄りて集まり鯨にと

畑宮栄子

出番わづかや太り気味なる鰯雲

宮崎チアキ

またここで待つてゐますよ鰯雲

樋口元美

孫の手に色取り取りの鰯雲

持永喜夫

昼よりも白し月夜のいわし雲

日高道を

鰯雲その数だの祖祖祖父母

本橋稀香

野良猫のそばに家猫鰯雲

檜鼻ことは

鰯雲棒高跳の棒撓ふ

森 和子

入相の頃蝸と化し鰯雲

福田千春

シート真つ白ぱりつと乾く鰯雲

森川義子

青春の欠片つらなる鰯雲

保坂翔太

いわし雲ゴッホと賢治同じ人

森下山菜

病室の窓いつばいの鰯雲

曲淵徹雄

御先祖の行事無事済み鰯雲

森下美智枝

うろこ雲眺めてゐれば点描画

山岸久美子

太平洋丸ごと覆ふ鰯雲

池田珪子

柚道のきつき登りや鰯雲

山下ユリ子

鰯雲笠智衆似の祖父の下駄

石田慶子

鰯雲つり糸空に投げてみる

湯浅 和

安曇野の空にさざ波鰯雲

井上玲子

缶詰に収まる鯨鰯雲

吉川拓真

鯖雲に飛び乗つてやるけんけんぱ

梅澤輝翠

棟上げを掛け声高く鰯雲

横山君夫

先頭は海へなだるる鰯雲

梅澤佐江

鰯雲喰うてやらんとギアチェンジ

横山礼子

鰯雲タクト一閃まはり初む

大場順子

弱音吐く大丈夫よと鰯雲

綿引まりこ

十二階窓いつぱいの鰯雲

岡田宣子

鰯雲余生にあらぬ今生きる

秋谷風舎

暮れてなほ智恵子の空の鰯雲

新 曆文

鰯雲どこか遠くに誘ひをり

阿部幸代

☆

☆

行合の空泳ぐが如き鰯雲

荒井俱子

この齡千千に乱れて鰯雲

飯田忠男

## 山紫集作品評

### 網野月を

街に來て道にまよふ子 鯛雲

池田雅夫

「道にまよふ子」は何処から來た子なのであろう。どのくらしいの年頃の子なのであろうと色々な想像してみる。「道」とあるので、人生の道、人道とも読めるのであるが、深読みしすぎであらう。単に初めての街で「道にまよ」ったと捉えた方が穩当である。そしてこの「まよふ子」には、必ずや親切な方が道を教えてくれたでしょう。もしかしたら作者ご自身かもしれない。

波滯に他 県ナンバー 鯛雲

篠原さよ子

最近ナンバードライヴを見て、車の本籍を確認しながらドライヴを楽しむことがあるのであろうか。「相撲」ナンバーとか、県名ナンバーとか楽しんだものである。これは決して営業中のドライバードライバーの所作ではない。行楽の行き来のドライブ中のことであらうと想像する。何故ならば、「鯛雲」だからである。筆者が勝手に鑑賞させて頂きました。

鯛雲 つい密航を企つる

内田恵子

季語と句意の距離感が絶妙なのである。いわゆる飛躍した句ということになるであらう。がしかし、物語を紡ぎ出していると言うことも出来るのではないだろうか。「企つる」の主語は、作者なのか、それとも他者なのか。最近は何中主語のような視点から鑑賞したり、作法に用いたりする俳人がいらつしやる。かつては主語の呈示の無い句の場合は、主語が作者自身というのが、オーソドックスな句の鑑賞であった。もしこの句が句中主語（別の用語を使用する方もいます）の技法を用いて作句された句であるならば、ファンタジーを語っているようにも考えられる。この作法が俳句の世界を大きく拡大する可能性を秘めているとも、野放図に使用した場合の危険性も十分に考える必要性を筆者は愚考している。

復旧せし赤き鉄橋 いわし雲

石川理恵

上五に「復旧せし」とあるからには、被災した地域の「鉄橋」であらうと推測する。「いわし雲」が復旧を祝っているように読める。「赤き」は、鉛丹、もしくは赤錆であろう。環境に拠ってはダークグリーンの鉄橋もあるそうだ。

思い悩むことの多い昨今、筆者などはこれっぽちのことばかりなのですが、「復旧せし」に勇気づけられました。俳句にはこういう力もあるんですね。

鯛雲 そろそろ部屋の様替へ

野口和子

季語を、季節の到来もしくは季節の移ろいという具合に捉えて作句した句である。文字通り季語は全て季節を直喩・暗



喩することの出来るものであるから、この句の作法は伝統的な作法であり、常套と言っても良い作法なのである。それだけに小細工の無い、敢えて捻らない作法が功を奏している。カレンダーに頼らずに体感で月日を過ごそうとする作者の生活感が滲み出ている。

気がかりもなるやうになる鰯雲 中山いちい

この句の季語の存在感は読者に拠って異なるかも知れない。「さがかりもなるやうになる」を季語「鰯雲」のイメージで受け止めているのであるから、ポジティブというか幾分かあつげらんとした観がある。白雲で陰のない「鰯雲」の特性をよく把握していて、兼題ではあるのだが、季語の幹旋が効果抜群なのである。

犇めきて競ふ気球や鰯雲 青木鶴城

何とも夢いっぱい景である。関東では、渡良瀬遊水池が「熱気球の聖地」ということになっているらしい。世界では一五〇もの気球が一度に飛び立つイベントもあるそうで、将に「犇めきて」なのである。壮観な景を「鰯雲」が引き受けて十分な度量を示している。

遺伝子の螺旋の如き鰯雲 石関六弦

中七に「：如き」を用いていて、いわゆる直喩表現の句である。この句のように直喩表現は、喩えた事物と喩えられた事物に共通性が少ないほど成功する場合が多い。喩えた「遺

伝子の螺旋」は、最近、小学校の教科書にも掲載されている右巻きの二重螺旋、あれである。人の場合、数十億個のゲノムに含まれる遺伝子は数万個ということらしいのだが、閑話休題、つまり肉眼では見えないということがこの句の叙景法には肝なのである。ミクロの世界と遠い天空の世界の対比も素晴らしい。

マーチング指揮杖の先鰯雲 原田秀子

季語「鰯雲」を作者は何処に発見したのかを詠んだ句である。むろん作者が「鰯雲」を発見しているのだが、結局は季語の在り処を指し示すことになる句は多々ある。だがこの句の場合は、中七に敢えて「：先」と表現することで、読者の「杖」の動きを惹起させて、詠み手の視線が「鰯雲」の発見に繋がったことに成功している。マーチングの指揮杖は実に様々な動きをする。単に上下だけではなくて、円弧を描いたり、アクロバティックな演出も有るのである。そこまで読み込むと、「杖」が釣り竿のように思えて来て、諧謔も感じ取れる句になる。

プリズムに透ける虚空の鰯雲 菅原卓郎

続いてこの句も「鰯雲」の位置を呈示する句である。季語の存在を何処に配するのが、構想力の中心であって、作句の妙であり、工夫の為所である。この句は所謂一句仕立ての句であり「プリズム」を中に作者と「鰯雲」が対峙している構図である。

# りんどう忌の記



青木鶴城

曇り空の怪しい天気ではありましたが、残暑が少し和らいだ九月三十日、第五十五回「りんどう忌」が浦和コミュニティにて修されました。

参加者は四十二名。最近どの大会に於いても参加者が四十名を超えている状況は大変喜ばしい限りで、かな女師の遺影も喜びの笑みを称えている様に思えました。

司会の日高道を総務部長の開会挨拶の後、かな女師への黙祷を捧げ、山本鬼之介主宰の挨拶を頂き句会へと移りました。(投句総数八十四句、互選五句選、季音「雪欄」作家は十句選、副主宰は二十句選)

## 長寿のお祝

今年米寿を迎えられた近藤徹平氏、喜寿を迎えられた染谷風子、森下美智枝の各氏に主宰より夫々の名前の文字が詠み込まれた句の色紙と色紙掛けが贈られ、皆様よりの賛辞と拍手に包まれました。表彰された皆様おめでとうございました。

荒城や月夜を徹し平家琵琶

鬼之介

風の子の吾も喜の字よ菊の宴

鬼之介

紅葉づる千枝美景いよいよ那智の滝

鬼之介

## 披講

保坂翔太、曲淵徹雄

## 主宰詠

字をかかれ燥ぐ掌りんどう忌  
町を越え呼びあふ句碑やかな女の忌

## 主宰選

天  
淑やかに綾なす雲やりんどう忌 秋谷風舎



## 祝ご長寿

主宰より喜寿・米寿のお祝いを

地

従へる玉藻駒草かな女の忌

網野月を

人

墓仕舞ひ洞より出づる秋の蜂

小林京子

——天・地・人（色紙授与）

りんどう忌紅差指のしなやかに

道子

残照を慈しむかに秋の蜂

直子

紫は高貴な色ぞかな女の忌

真由美

木の洞に入るか出るのか秋の蜂

節代

かな女忌へ風押しして行く坂の町

鶴城

秋の蜂給与明細覗く妻

佐江

——以上超特選（短冊授与）

りんどう忌句碑は導師の置き手紙

由紀子

残生は陽溜りにあよ秋の蜂

喜恵

廃線の駅舎の名残り秋の蜂

徹平

花時計長針が追ふ秋の蜂

輝翠

かな女忌に紫色背表紙繕きて

かつ子

秋の蜂引き返すならこの辺り

佐江

生き様に男の美学秋の蜂

翔太

句碑の字のかすれを修しかな女の忌

昇

暮れつ方花舗の窓打つ秋の蜂

喜恵

供花乾く墓石に群るる秋の蜂

徹平

始祖の句碑「一杯」にまごつく秋の蜂

延昭

老残の兵がなし秋の蜂

千重子

りんどう忌人柄しのお筆づかひ

宣子

補修の句碑文字生き生きとかな女の忌

真理

——以上特選

別れ際の口約束や秋の蜂  
秋の蜂和本の中に住むかな女  
鍵穴にじつと動かぬ秋の蜂

水明の風は順風かな女の忌

人住まぬ家の光陰秋の蜂

かな女忌や古書肆の奥の拾ひ読み

唄ふならアルトが宜しかな女の忌

焼きお握りを立ち食ふや秋の蜂

脚長き秋の蜂来る花の茎

役目終へ天命とげる秋の蜂

とこしへの天地の影やりんどう忌

かな女忌や水の心の連綿と

全集の語る重さやかな女の忌

茶房の庭秋の蜂群れキラキラり

あの威嚇どこやら失せる秋の蜂

音も無く墓花を飛ぶ秋の蜂

お句あまた清しきかほりかな女の忌

かな女忌に花寄せ籠に紅芙蓉

近道といへど難所や秋の蜂

秋の蜂枝の青虫吸ひ尽くす

たちのぼる月のほほ笑みかな女の忌

紫を抜け俳句の旅へかな女の忌

紫のかの子紋もかな女の忌

光放つ句碑の白文かな女の忌

空の巣かと触れば襲ふ秋の蜂

悪童に逆襲したる秋の蜂

静香

節代

桂子

昇

栄子

マスミ

稀香

延昭

風舎

ひろこ

章嘉

更穂

鶴城

チアキ

千重子

宣子

真理

由紀子

美子

義子

輝翠

久美子

公子

かつ子

茂子

美智枝

紫の糸を手繰りてかな女の忌  
よろけつつ抱く肉団子秋の蜂  
生垣が杜へと誘ふかな女の忌

悪筆の父は伊那の子秋の蜂

カフェで食むときわだんごやかな女の忌

かな女忌や水の明りに詩のこと葉

凜と立つ天地の句碑やりんどう忌

厨から大路へ立ちしりんどう忌

弱りしを螫さぬ矜持や秋の蜂

本堂で猫パンチ食ふ秋の蜂

かな女忌や紫が好き母が好き

はるみ

翔太

月を

京子

貞代

道子

知子

徹雄

紫の糸を手繰りてかな女の忌

よろけつつ抱く肉団子秋の蜂

生垣が杜へと誘ふかな女の忌

悪筆の父は伊那の子秋の蜂

カフェで食むときわだんごやかな女の忌

かな女忌や水の明りに詩のこと葉

凜と立つ天地の句碑やりんどう忌

厨から大路へ立ちしりんどう忌

弱りしを螫さぬ矜持や秋の蜂

道子

徹雄

知子

直子

真由美

風子

貞代

京子

月を

翔太

はるみ

高得点者の発表と商品授与

一位 梅澤佐江 二位 石井喜恵

三位 近藤徹平 四位 日高道を

五位 石山かつ子 六位 小林京子

七位 丸山マスミ 八位 松井由紀子

主宰の講評を頂いた後、網野月を副主宰の閉会の辞を以って無事終了しました。各受賞の皆様おめでとうございました。

会場の予約抽選で午後一時からしか会場が取れず、終了が午後五時半を過ぎてしまいました。状況をご理解下さい。

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

茂木和子  
小林京子 報

坂下る影先立てて月の客  
百の手を小粋に反す風の盆  
夕影や鳴く音みじかきつくつくし  
風の盆二つの影が消ゆる闇  
峡の闇に胡弓溶け行く風の盆  
町筋を顔伏せ通す風の盆  
手のひらで風押し返す風の盆  
幻影を消し去る如く秋の空  
秋虹に機影染めゆくハワイ便  
明眸は笠のうちなり風の盆  
風に乗る胡弓哀しき風の盆  
真夜となり地元民だけ風の盆  
秋寒し己が影おく石畳  
風の盆泣かんばんかりに胡弓の音

喜恵  
由紀子  
徹平  
マスマ  
延昭  
はるみ  
以上特選  
卓郎  
由紀子  
節昭  
喜恵  
稀香

——以上特選

## 第二例会（東京）

山中みどり  
青木鶴城 報

静静と闇に溶けゆく風の盆  
むせぶ胡弓に揺るる編笠風の盆  
風の盆真顔の眉の太きかな  
菅笠より白きてのひら風の盆  
風の盆しほり出すよな胡弓の音  
哀愁を帯ぶる胡弓や風の盆  
恋歌を切なく胡弓風の盆  
咲きのほる朝顔の影人のかげ

マスミ  
千祐  
京子  
順子  
和葉  
チアキ  
徹平  
和子

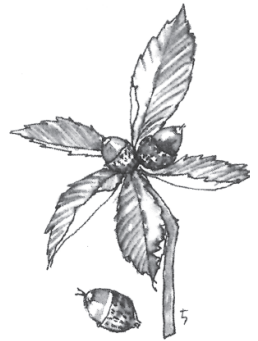
足の小指骨折してた夜の満月  
月の夜の電話の友の声弾み  
声出せぬ術後の夫や草雲雀  
公園は月と遊びぬ遊具たち  
月白や夕空高く浮かびをり  
指くるくる蜻蛉ゆらゆら昼下がり  
月隠し流れゆく雲軽やかに  
ひとり聴く路上ライプの草雲雀  
名月やビルの屋上朱の鳥居  
漱石の好きあなたは月の中  
かぐや姫の牛車横切る秋の月  
来客に耳を澄ませば草雲雀

千春  
サカエ  
敏江  
竺仙  
妙子  
りこ  
峰雄  
千春  
慶子  
みどり  
鶴城  
五淵徹雄 報  
曲淵  
康世

## 第三例会（東京）

蕎麦の花盛る里曲の夕あかり  
山並のゆるきでこぼこ蕎麦の花

五淵徹雄 報  
康世



棹を置く流れの土手に蕎麦の花  
平家谷の蕎麦を守り継ぎ蕎麦の花  
伝説に生くる落人蕎麦の花  
学舎も役場も失せて蕎麦の花  
アルプスの山巔峨々と蕎麦の花

星 歩  
順 子  
徹 雄  
昇

蕎麦の花夜目にも白き裏の畑  
北の空丸ごと花そば幌加内  
花蕎麦や丹色の削げし摩屋仏  
戸隠山の裳裾ましろし蕎麦の花  
芒野を突つさる鉄路つむじ風  
蕎麦の花見て戸隠で蕎麦を食む  
蕎麦の花黒部を見遣る扇状地  
蕎麦の花一峰晴るる八ヶ岳

以上特選  
星 歩  
千 祐  
萬 蝶  
順 子  
雅 夫  
康 世  
徹 雄  
昇

### 第四例会 (浦和)

石井喜恵  
反町修報

然りげなく風を馳走の秋扇  
サルビア燃ゆ海を見下ろす異人館  
いけず口はんなり隠す秋扇  
遺訓めく墨書の一字秋扇  
一瞥のサルビアの緋や目に痛き  
芝居跳ね今日を閉ちゆく秋扇  
サルビアの燃ゆる三時の花時計  
忘れて力の抜けし秋扇

昇  
〃  
〃  
延 昭  
光 子  
マスマ  
喜 恵  
以上特選  
由紀子

以上特選

### 第五例会 (浦和)

梅澤佐江  
河野はるみ

サルビアの道離れて歩く二人  
迷ひなき白杖の歩や緋衣草  
仲人の饒舌とまり秋扇  
旧道のサルビア盛り静かなり  
サルビアの燃ゆる入口美術館  
旅果ての名残りをたたむ秋扇  
烈日やサルビアの赤の残照  
手弱女の欠伸の気配秋扇  
秋扇すこし遅れて流行追ふ  
旅立ちや鞆に入るの秋扇  
サルビアの赤の寂しき尼僧院  
此所一番はたと膝打つ秋扇

行 雄  
マスマ  
曆 文  
光 子  
寛 治  
玲 子  
でん治  
翔 太  
恵 子  
修  
延 昭  
喜 恵

遠ざかる昭和の歌をさく良夜  
一湾の良夜さへぎるものなし  
鬼の子や地蔵の袖に宿を借り  
宿明かり川面に映る良夜かな  
糸電話の糸金色に良夜かな  
パリコレのモデル宜しき蓑虫よ  
鬼の子の浮世をのぞく日和かな

義 子  
玲 子  
宣 子  
はるみ  
佐 江  
〃  
以上特選  
宣 子  
玲 子  
義 子

### 若松例会 (京橋)

正木萬蝶  
石田慶子

鬼の子やひきこもる子は窓明けず  
良夜かな照らされ浮かぶ瓦屋根  
手をつなぎ漫る歩きの良夜かな  
水煙の天女舞ふらん良夜かな

千 祐  
知 子  
はるみ  
佐 江  
月 を  
はるみ  
稀 香  
京 子  
佐 江  
詠 子  
鶴 城  
月 を  
以上特選

ほほづきや勢ひ余る師の筆致  
木星の輝く空に流れ星  
ご神木なでて孫ゆく九月かな  
鬼灯や提灯ブルマ眩しき日  
夕まぐればほほづき髪にきつねの面  
新走り杵の木目の香り立つ  
かがり鳴らすや平安の香の漂ふ夜  
鬼灯を鳴らす口には矯正具  
母の忌の膳に鬼灯一つづつ  
鬼灯を鳴らす丸顔なほ丸し  
鬼灯や袋裂き裂き四つに咲き

詠 子  
鶴 城  
千 祐  
京 子  
佐 江  
千 春  
マスマ  
詠 子  
はるみ

夢透けて鬼灯ひがな夕陽色  
棄て烟の鬼灯色なすひとところ  
真夜のほほづき鬼の宴の忘れ物

ひろこ  
稀香  
萬蝶

### 関西例会（大阪）

森本早苗報

秋水へばつと観光投網打つ  
新涼や香りののこる青畳  
充電か電線に群る去ぬ燕  
秋の水底まで見ゆる魚の群れ  
銀鱗の清らな揺らぎ秋の水  
一勺の秋水跳ぬる水琴窟  
校庭に声の弾くる野分晴

和子  
道子  
千津子  
さわゑ  
人美  
早苗

深山より秋連れ来たる流れかな  
静もればもう知らぬ街台風来  
細石の動きも透くや秋の水  
新涼や子役の口上凜と張り  
新涼や石庭を掃く若き僧  
刀研ぐ大さ父の手秋の水  
一斉に風になひかふ濃竜胆  
人生を百迄生きる秋の夢  
起き抜けの水道水に秋気配  
志ん生の郭嘶や虫の声

——以上特選——  
洋子  
人美  
千津子  
和子  
道子  
満耶子  
千世子  
さわゑ  
嶋田洋子  
早苗

## 昔話あれこれ42

### 長髪の美女 宣耀殿の女御

師尹公の娘で村上天皇の女御の芳子は魅惑的で可愛げな容貌であった。特に髪が長く内裏に参上するために牛車に乗ったが、芳子の身体は車に乗っても、髪のはげ御殿の柱の根元にあった。

髪の毛一筋を陸奥紙に置くと隙間が見えなかったということである。

目尻が少し下がっているのが一段と可愛く見えるのを、帝は大層ご寵愛になり、次のような歌をお詠みになった。

生きての世死にての後の後の世も  
羽を交せる鳥となりなむ

（大意）生きている今も死後もそのままの世でも比翼の鳥となって暮らそうね）

その返し

秋になる言の葉だにも変らずば

我も交せる枝となりなむ

（大意）秋になっても私に飽きておしまいにならず、お言葉だけでもお変わりがなければ、私も連理の枝となってお側をはなれませう）

### 古今集暗記

村上天皇は、女御が古今集を暗記しているとお聞きになって、本を隠して「仮名序」から始めて先ず第一句を読まれて、その後の句をお尋ねになると、詞書も含めて歌でも言い違えることがなかった。父の師尹公は、正装し、身を浄めて方々の寺に誦経を頼み一心に祈願したということだ。

帝は箏の琴を大変お上手にお弾きになったが、女御にもお教えなさるなど、大変なご寵愛ぶりであった。（つづく）



各地句会



水明鬼石句会 (鬼石)

秋風と共に踏み出す試歩の杖  
大根蒔く土の匂ひを手で掬ひ  
草の中家の中まで虫の声

りそな俳句会 (浦和)

稚児の乗る馬も化粧の秋祭  
復興地に轟く太鼓秋祭  
稲雀五穀豊稔願ひつつ

ひよつとこが正座してゐる秋祭  
里祭り直会を待つ薦被り  
一陣の風になりたる稲雀

櫻蔭句会 (浦和)

露草のおしやべり聞こゆ朝の庭  
露草が染めしか空の縹色  
秋めきて樹々のさやぎも夕雲も

久美子  
行雄  
多美子

聰子  
和子  
ナオ子

建治郎

久美子  
寛治  
マスマ  
雅夫

月代や茅葺き屋根の残る里  
月代や流木照らす九十九里  
虫の声石碑一つの関所跡

千重子  
富子  
修

柿の木塾 (浦和)

白むくげ一氣に暮るる山の駅  
せみ塚に蛸を聞く立石寺  
しぶしぶと燃ゆる生木や木槿咲く  
リハビリの亜鈴の重さ秋の蟬  
雨音にみじろぎもせず白木槿  
底紅や恩師の好む赤絵皿

芙蓉句会 (浦和)

千年の火を求めゆく秋遍路  
秋扇しづかに見遣る若尼僧  
千悔や手術及ばず秋の暮

芽吹句会 (浦和)

月代や茅葺き屋根の残る里  
月代や流木照らす九十九里  
虫の声石碑一つの関所跡

千重子  
富子  
修

ミモザの会 (横浜)

「帰る燕は木の葉のお船不」嗚呼帰燕  
山深く蜻蛉の誘ふ河童淵  
流星やきらきらネーム読ませぬ  
九輪水煙はるか過りて帰燕かな  
大河ドラマのうんちく語る秋扇  
父祖眠る落人の里秋燕  
秋つばめ東へ帰る息子あて  
帰燕してまた静かなり過疎の村

節代  
昇  
かつ子  
恵子  
章嘉  
和子

きざきサークル (浦和)

杯を手にバツカス捜す星月夜  
アマゾンの吠え猿の声星月夜  
藪枯らし子等から奪ふ秘密基地  
いつよりの放置自転車藪枯らし  
砂風呂に波音聞くや星月夜  
阿六桶さぐる木曾路の星月夜  
めぐり逢ふ式部の恋や星月夜  
水底に貝の眠れる星月夜

税子  
仁  
美子

月下鉄に揃ひ装束秋祭  
月代や湖の女神の舞衣  
田をわたる秋の祭りの笛高し  
呼びこみの出店の勢ひ秋祭  
転勤の関東平野に夜夜の月  
月代や鎮守の杜に胡弓の音

千重子  
富子  
修

幸代  
茂子

節代  
昇  
かつ子  
恵子  
章嘉  
和子

史代  
詠子  
栄子  
玲子  
慶子  
萬蝶  
亜弥子  
千春

公子  
由紀子  
真理  
美子  
千恵  
美智枝

田中弘  
チアキ  
玲子  
久美子  
道を

由美子  
啓子  
俱子  
健司  
和枝  
和子

山茶花 (浦和)

セリコで行く見上ぐる先の秋の雲  
残照に束の間の艶秋の雲

美江子  
マスマ

りんどう俳句会 (浦和)

若い衆の威勢よき声秋祭

寛治

村一つ沈むばかりに糸瓜垂れ  
糸瓜棚ひよいと老婆の現るる

君夫

初嵐とくと仕上ぐる竹とんぼ  
若干の雨では止まぬ踊太鼓

順子

縁台に寝かせ置きたる糸瓜かな  
月光に打たれ若者奮ひ立つ

夕峰

初嵐辛めに作る鉄火味噌  
初嵐夫婦の旅は吉兆か

徹雄

連れ去らるる畝の残り香初嵐

風子

蘭の会 (浦和)

咲き継ぐやカンナの主張底知れぬ

さよ子

誰も彼も食はぬカンナや畑の顔  
老亀の浮かびはじめて九月かな

風舎

己が朱を持て余したり花カンナ  
父生まれ母旅立ちぬ九月かな

寿夫

放たれて鶏鬮歩カンナ咲く  
九月かな分きて教師の声高く

伸子

白粥にぎざみ味噌漬九月かな

小麦

秋晴れや京都訛の指導員  
カンナ燃ゆ競馬場からファンファーレ

夕峰

花カンナ天までとどけ青空へ  
単線の小さき浦浦カンナ咲く

まりこ

マラカスの刻むリズムや花カンナ  
視野失くす母の無念や花カンナ

三千子

日輪を引き摺る如く朱のカンナ

留美子

和歌山水明句会 (和歌山)

月を

仲麻呂の愛でし月代われも佇つ  
縁側に榎櫃が一つ尼の寺

鶴城

稜線を徒歩で楽しむ初紅葉  
秋日和会の重なる展示会

京子

秋暑し家の片付け延び延びに  
足早に見上げて歩く昼の月

和子

小さい秋見つけに老の一人旅  
推敲の達人までど無月句座

道子

水明瀟つくし句会 (大阪)

千枝子

黒猫や魔女を待ち伏せ秋北斗  
毬栗を踏み込み胸の底の澱

千世子

毬栗の大枝活けて道の駅

道子

青葉の会 (浦和)

洋子

坂多きサンフランシスコや秋の旅  
坂道を下れば秋の日本海

智恵子

女郎花いまを盛り of 眞性寺  
秋時雨しつぼり歩く坂の町

美智枝

坂下る銀輪風に秋の朝  
仏前に故郷恋しき女郎花

啓子

女郎花土塀に沿うて道案内  
上野の森のシャガール展へ秋日傘

公子

六地藏に朝一番の女郎花

洋子

鶴川山百合句会 (鶴川)

和子

ほうせんかだけが残りし母の庭  
あの子いま何処にあるや爪紅

美子

ほうせんか花風が遊びに来て弾け  
ちよつかいを出すは好きな子鳳仙花

美千子

笑ひ声聞くとびはぜる鳳仙花  
老犬やふいに弾けて鳳仙花

千春

付けペンより不思議ワイルド鳳仙花

うさぎ

皐月の会 (浦和)

玲子

秋の昼チューバの女子の大軒  
鶏の浮かれ歩きや秋の昼

山菜

夕霧やたてがみ振りつ仔馬來ぬ  
リムジンの路線変へたる祭笛

更穂

シンブルに生きて徳積む温め酒  
秋深し徳の積まれし法隆寺

光代

霧霽れて河童橋より笑ひ声  
故郷より届く便あり芋の秋

静香

きいち



雜の会 (浦和)

ちちろ鳴く三本立の名面座へ  
蓑虫の軒一尺の世界あり  
月山へ参拝つづく大花野  
蓑虫や細身に余る帯の長  
蓑虫の風通し良き聒かな  
花野ある限りやさしき空の色

若狭水明会 (若狭)

汗濡れのままに無花果貪れり  
無花果の裂けて熟度を曝け出す  
無花果の日ごとに熟るる坂の家  
無花果や会釈交しただけの人  
聞き取れぬ喪主の挨拶法師蟬  
草刈つて海広広と沖の石  
静けさや水の底まで秋の空  
女子サッカー残り五分や法師蟬  
つくつくし第九の稽古始まり  
勤行の声に張り合ふ法師蟬  
法師蟬止まらぬ母のお節介  
水の事故告ぐるラジオや法師蟬

珊瑚の会 (浦和)

薄原抜けて風径仏徑  
相席のピアスの揺るる走り蕎麦

輝翠  
燈女  
公子  
喜恵  
チアキ  
佐江

鼓  
保人  
ことは  
初花  
和風  
寛久  
白鷺  
八重子  
郁子  
友夏  
祥子  
笑風

九頭竜の瀬音も馳走走り蕎麦  
出羽三山畏みて待つ走り蕎麦  
ハーメルンの笛の音聞ゆ薄原  
立ち喰ひの新蕎麦啜る乗換駅  
薄野を赤き一両電車過ぐ  
夕日影芒手招きしてゐるよ  
奥信野旅は道づれ走り蕎麦  
野ばらの会 (浦和)  
仏間へとくぐり来る風秋簾  
飛白織る機音かすか秋簾  
お隣は挨拶もなく秋簾  
法師蟬山の童の手の迅し  
限りある恋の行方やつくつくし  
椀の会 (浦和)  
新そば案内ごつい店主の瀟洒な字  
新蕎麦やうす緑いろ玲瓏と  
艶めける金継ぎの碗星月夜  
禁教令に耐へし五島や星月夜  
宿坊の膳に新そば般若湯  
山小屋に小さき天窓星明り

蛸の会 (浦和)

「原の城」武者像の肩赤蜻蛉  
深山茜清き水辺で生きる赤

マスマ  
昇  
恵子  
史代  
広子  
和子  
節代

栄子  
秀子  
夏江  
茂子  
みき子  
富子  
文子  
あつ子  
朋子  
裕誌  
千重子  
幸子  
さち子

篝火にシテの摺り足秋澄めり  
秋澄めり葉師寺の塔仰ぎ見る  
乾漆の観音像や奈良の秋  
乾電池あちこちに置く厄日かな  
一斉に翔び発つ鳩や秋澄めり  
笑み軽き乾漆仏や秋遍路  
流れゆく雲の速きや秋澄めり  
五星紅旗の紅にはあらず赤まんば  
秋うらら何事もなき乾門  
秋茜群れの中なる吾子染まる  
たかな俳句会 (川口)  
芋風地蔵の頭巾撫づるかな  
教室の眠りを誘ふ昼の虫  
黍風こんな所にバス停が  
永住の此の地ふるさと虫時雨  
めんそーれざわわざわと黍風  
江ノ電に時つ風沿ふ秋の海  
小梅の会 (浦和)  
秋風や長押の上の父と母  
線香のけむり一筋秋の空  
電話から懐かしき声秋来る  
秋の山阪急電車走り出す  
九十九折右に左に秋の山

秀子  
しるく  
ひさの  
夏野  
風舎  
礼子  
元美  
月を  
鶴城  
宣子  
謙一  
のり子  
小麦  
義子  
鶴城  
静香  
恵子  
隆然  
隆文  
道

コクーンシテイカルチャイ俳句教室(さいたま新都心)

カンナ燃ゆ庭に干涸ぶ飼馬桶  
自転車を立ち漕ぐ少女稲光  
生さる事楽し樂しとカンナ咲く  
柵越えの球は此処らに葛の花  
カンナ燃ゆ発火しさうな休耕地  
常念の稲妻横へ走りけり  
奥鬼怒のぬるき外湯や葛の花  
野分あと名残波衝く巡視船

円卓の会 (浦和)

遠き日のことなど少し秋裕  
畦道を孤影を曳いて穴惑  
秋の蝶砂丘の空へ吹かれ行く  
赤とんぼ花嫁乗せて人力車  
蛸の仕舞ひの声の澄みゆけり  
活断層を避けて蛇穴に入る  
改札をSuica通すや秋裕  
スケッチの仕上げの色や花野風  
街の灯に心の揺らぎ穴惑

俳句の手ほどき (岩槻)

憧るる理系の学徒花桔梗  
花頭窓より臨む桔梗の濃紫  
道の辺の無縁仏に白桔梗

延昭 健司 洋子 早都子 俱子 由美奥 美枝子 昇  
義江 子

置文は料理のメニュー馬肥ゆる  
休暇明け布団めくれれば置時計  
桔梗を軸の懸巢鳥に添へてやる  
延べ段の影を拾うて白桔梗  
菊の日に箔置き帯凜と締め  
秋雨や夜のマイセン置時計  
野辺に咲く桔梗にうつとり道迷ふ  
桔梗や明けのほこらに御神灯  
主去るも家族見守る桔梗かな  
桔梗咲く御高祖頭巾の女人かな  
置鈎をつぎつぎ仕掛け湖の秋

新樹の会 (浦和)

秋鯖や女界灘の波頭  
必勝の襷を肩に運動会  
長寿には必須なりとやとろろ汁  
必ずの書き順奇妙秋の夜  
秋場所や必勝の文字二階席  
大迷路必死に跳く穴惑  
必ずの約束なんて秋時雨  
水明熊谷句会 (熊谷)  
組紐の雅なる色初紅葉  
竜胆や港見下ろす番外地  
秋の宵灯火もれたる組子窓  
雨冷や黙して飲まむ火の酒を

翔太 徹平 忠男 桂子 美子 幸代 久美子 卓郎 千アキ 知子 かつ子  
徹雄 風子 修通 清吉 道城 鶴城 栄子 徹平 卓郎 風子

無造作にりんどう活けて峯の茶屋  
冷やかや鶯張りの高廊下  
濃竜胆袖の祠に寄り添うて  
渾身の色に古刹の濃竜胆  
冷やかに人の名の出ぬ八十路かな  
神戸大池句会 (神戸)  
心たつ故里は今鳥賊襖  
秋茄子の味噌煮上々笑ひ声  
野菊の会 (与野)  
唇は口臭ぞ暑き秋  
底紅や師の好みたる赤絵皿  
前をゆく夫の背を追ふ大花野  
さりげなく野菊の野路で紡ぐ詩  
坂道を上る楽しさ天高く  
秋の七草巡りて寺の名を忘る  
若楠句会 (浦和)  
由比ヶ浜の白波静か野紺菊  
名も読めぬ祖先の墓や秋彼岸  
鯉濃を好みし郷や秋彼岸  
「彼岸には「彼岸」の習ひ秋彼岸  
秋彼岸過ぐれば残す三月かな  
煎り胡麻や一家総出の五平餅  
今さらに出世とは何胡麻を搗る  
秋深し喰ふも喰はぬも自由なり

秀子 道男 燈子 茂子 千津子 早苗 美代子 和子 清子 倭子 恵子 光子 京子 真由美 風舎 葉子 直子 鶴城 宏治

若 枝 句 会 (浦和)

豆腐売るラッパの音や赤蜻蛉  
満月や剃髮行の清々し  
球場のトライアウトや竹の春  
草木の姿整ふ月今宵  
雨上がり月暈浮かぶ今日の月

あ ゆ み の 会 (浦和)

手遊びの小さき鶴折る秋の夜  
枝豆やぼんと飛び出す出羽訛り  
枝豆や農家に出向き買ふ日課  
夕食に取った枝豆食進む  
枝豆の莢山にして聞き上手

め だ か 句 会 (浦和)

死に方は生き方と知る彼岸かな  
そぞろ神に誘はるるまま月夜茸  
何故何故と野分を恨む能登の声  
収穫は金の頭の猫じやらし  
野分去りひらり相寄る糸蜻蛉  
ハサミ入れ重さ実感黒葡萄  
那須連峰雲を突き抜け蝦夷龍膽  
朝顔や口角上げて紅を引く  
コスモスや甘え上手な女の児  
ごみ出しの軽き会釈やカンナ道

美佐子  
しようこう

貞代  
泰子  
みどり

俱子  
啓子  
和

山遊  
藻好

道代

樂

三芽

はるみ

莊志

敦子

哲生

美津子

知子

六弦

夕野分抗ひて飛ぶ鳥一羽  
茜空風に吹かれて芒の穂  
雨降れば傘ある茸なき茸  
リーゼント髪気になる野分かな

若 鮎 句 会 (浦和)

秋灯本の世界を彷徨ひて  
秋の灯を雲間に捜す空の旅  
秋の灯や鳥も子供も急ぎ足  
現人の身を軽々と落葉かな  
工場跡門扉の前に泡立草  
ただいまにおかへりのあり秋ともし  
掲示板計報吹き飛ぶ野分後  
秋の灯や虚子を抛つてかな女読む  
川辺にて一人立つ吾泡立草

和子  
千鶴子  
月城

香音子

貴真

秀子

芳春

道郎

稀真

月香

鶴香

喜夫

城

## 通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。  
希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を
- [作品] 5句 [受講料] 1,000円
- [方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付
- [送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

『俳壇』

十月号

現代俳句の窓

ちまたの夏

菅原卓郎

〔水明〕

炎昼の御明かしゆるる籠り堂

棟上げの梁に清めの雷雨かな

六方で去りし弁慶暑氣払ふ

御成り道駆くる儀装の馬車驟雨

「寛解」と友へ添へ書きビール酌む

一球に響動む球場空ひでり

俳句四季新人賞

受賞記念作品20句

俳句四季新人奨励賞

受賞記念作品20句

新人賞最終候補者

競詠5句

関灯之介

加藤幸龍  
中西亮太

●好評連載  
成瀬政博  
とりあえずの日々

筑紫馨井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

俳人の響き

句の手廻り、

大西朋

俳句のまなざし

井上泰至

俳句の詩語

イメージ辞典

神作研一

てのひらの江戸  
古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつよみ

秘矢まりえ

諸家書架

二ノ宮二雄

一望百里

人と作品

広渡敬雄

『全国・俳枕の旅62選』

相子智恵／伊藤伊那男

井越芳子／渡辺誠一郎

●巻頭三句

遠山陽子／坂口緑志

古賀雪江／大屋達治

高松守信／渡井恵子

●今月の華

浅川芳直

星野 愛

杉山久子

●俳句と短歌の10作競詠

辰巳泰子

俳句四季  
Haiku Shiki

2024年12月号

11月20日発売  
定価1100円(税込)

https://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

97

一般社団法人 現代俳句協会・会員誌

WEB版『現代俳句』(現俳ウェブ)

11月号無料公開中

※じなた様もご覧いただけます



特集一 現代俳句協会年度作品賞

受賞作 『霧の海』村田珠子・「解題」対馬康子  
佳作 『そらいろの空箱』望月士郎  
『さりさと』木村和也

特集二 「横山白虹と松本清張」

連載中 現代俳句管見記、名句・名著の評論、  
海外俳句鑑賞、ふるさと巡り、春秋余滴ほか

〈協会から〉

第61回現代俳句全国大会開催(奈良)のご案内

- ・ 11月16日(土) 13時より「ホテル日航奈良」
  - ・ 各賞表彰式、入選句パネルディスカッション
  - ・ 記念講演 坪内稔典氏「俳句の未来」
- 【参加費無料】 会員でなくても参加できます。参加希望者は  
至急現代俳句協会へお問合せ下さい。

電話 03-3839-1819

角川『俳句』別冊 カドカワムック

12月6日 発売予定

予価 3300円(税込)

俳句年鑑 2025 年版

2023.10 ▶ 2024.9

口絵

二〇二四年一〇〇句選……小林貴子選  
写真でたどる二〇二四年の俳壇

【巻頭提言】

橋本榮治

年代別 二〇二四年の収穫

諸家自選五句……約六〇〇名!

今年の句集ベスト15 四協会の一年  
今年の評論ベスト7 各俳句賞のひとつとほか

合評鼎談

総集編

横澤放川・辻村麻乃・抜井諒一  
今年の秀句を振り返る  
(令和俳壇「心に残る秀句」発表!)

● 全国結社・俳誌 一年の動向 都道府県別目次付き!

● 全国俳人住所録 約二〇〇〇名を一挙掲載!

※内容は変更になる場合があります。

KADOKAWA

発行:角川文化振興財団 発売:株式会社KADOKAWA

● お問い合わせ先(注文) TEL.0570-002-008 (KADOKAWA購入窓口)



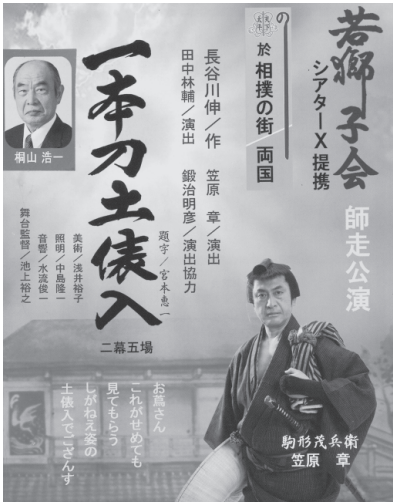


観てください

「二本刀土俵入り」

水明の詩友で、鬼之介の四十年來の友人・桐山浩一（俳号「遊童」）さんが、劇団・新国劇の名代演目「二本刀土俵入り」で、「波一里儀十」という重要な役を演じます。この役は、昭和六二年の新国劇創立七十周年記念公演で、巨匠・島田正吾さんにしごかれて演じた想い出深いものだそうです。

よろしければ、ぜひご観劇の上、応援願えれば嬉しいですよ。山本鬼之介



令和6年 2024年

12月4日(水)～8日(日)

|      |       |       |       |       |       |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 開演時間 | 4(水)  | 5(木)  | 6(金)  | 7(土)  | 8(日)  |
|      | 14:00 | 13:00 | 13:00 | 12:00 | 13:00 |
|      |       |       | 18:30 | 16:00 |       |

入場料  
全席指定  
6,000円(税込)

劇場 東京・両国 シアターX<sub>カイ</sub>



〒130-0026 墨田区両国 2-10-14 両国シティコア1階 TEL 03-5624-1181

〔チケットのお申し込み〕

若獅子会事務所 TEL&FAX 03-6875-2408

プレイガイド

カンフェティチケットセンター <http://confetti-web.com>  
TEL 0120-240-540 (平日 10:00 ~ 18:00)

ローソンチケット [tike.com](http://tike.com)  
e+ (イープラス) <https://eplus.jp/> (PC・スマートフォン共通)  
ファミリーマート店内 Fami ポートでも直接購入できます

## 令和7年 新珠賞作品募集

水明新人賞である新珠賞作品を下記の要領により募ります。  
新人登龍門の主旨をよく理解されて多数のご応募をお待ちしています。

- 応募資格** 季音同人を除く同人・誌友
- 応募句** 未発表作品：15句(表題を付す)  
水明集・句会報等「水明」誌及び外部に発表した作品は不可。
- 締切** 令和7年2月末日(発行所必着)
- 応募方法** 令和7年水明1月号に応募用紙添付

## 水明創刊95周年記念事業のための 水明発展基金へのご寄付のお願い

平素より水明発展基金にご理解・ご協力を賜り有り難うございます。  
皆様ご案内の通り、水明は来年創刊95周年を迎えます。9月には記念の  
全国大会・祝賀会の開催を予定しており、他にも95周年の記念諸事業を  
計画しています。

水明発展基金は、通常その大部分を水明俳句会の運営資金の補填に使  
わせて頂いておりますが、この度は95周年の記念行事のためにより多く  
の資金を準備したいと考えております。

日頃より会員の皆様には様々な機会に発展基金への格別なご協力を頂  
いており、重ねてのお願いは誠に恐縮ではありますが、何卒主旨のご理  
解を頂き、ご協力を賜ればとお願い申し上げます。

本合併号に水明発展基金専用の郵便振り込み依頼書を同封致しました  
ので送金の際にご利用頂ければ幸甚です。

令和6年11月

水明俳句会 主宰  
水明発展基金 会長 山本鬼之介



## 水明創刊 95 周年 記念祝賀会・全国大会のお知らせ

### ■記念全国大会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）  
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和  
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1  
行 事 ・水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞、鼓笛賞、山紫賞  
の表彰  
・季音昇欄同人、新季音同人、新同人への委嘱状  
授与  
・大会記念作品の表彰（俳句、評論、エッセイ）  
・大会兼題句の入選発表、表彰、講評

### ■記念祝賀会

- 日 時 令和 7 年 9 月 28 日（日曜日）  
会 場 ロイヤルパインズホテル浦和  
〒 330-0062 さいたま市浦和区仲町 2 - 5 - 1  
行 事 ・来賓挨拶（高野ムツオ現代俳句協会会長）他  
・アトラクション他

※大会・懇親会の時間および参加費等の詳細については改めて  
ご案内致します。

## 風 声

○現代俳句九月号——「現代俳句の風」欄

風通悪しき庵や秋刀魚焼く

秋谷風舎

酒蔵に麴の匂ふ雁渡し

永野史代

あけ放ち月と添ひ寝をたのしめり

大橋勉代

防災頭巾試着してみる秋はじめ

西浦千枝子

○現代俳句九月号——「現代俳句年鑑2024」を読む」欄

内ひとみ氏の感銘の十句抄に

浮雲の影は田にあり夏初め

鳥羽和風

○かびれ（大竹多可志主宰）九月号——「寄贈俳誌紹介」欄

花丸をつけてやりたき冬の月

鬼之介

門の一途な構へ去年今年

持ち歌は未だ「王将」新年会

○くちら（中尾公彦主宰）九月号——「受贈俳誌美術館」欄

羅の羽織を恋ふる衣紋掛

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）九月号——「受贈誌御礼」欄

黒堀や浮世小路をゆく日傘

鬼之介

○幻（西谷剛周主宰）九月号——「受贈誌拝見」欄

身に余る金魚と暮らす画学生

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）九月十月号——「他誌拝見」欄

六月や疎水賑はす草車

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）九月号——「諸家近詠」欄

山雨急まちかねたるは秋田路

鬼之介

○翎（山本一步主宰）九月号——「受贈誌の一句」欄

店番に寡黙なオウム四月馬鹿

菅原卓郎

（日高道を抄出）

## 散歩道

さいたま市 松下しようこう

### 小説の舞台「田舎教師」の新発見

田山花袋は明治時代の小説家です。その代表作の「田舎教師」は昔読破し記憶しています。羽生市に残るモデルの墓や郷土資料館を訪ねると町民の温かい保存と案内がされています。20歳で亡くなった田舎教師小林秀三のこと、勤務地の弥勒高等小学校に食事の出前で出入りしていたお種さん、お寺には墓や「お種さんの資料館」が建立されていました。又、15世紀築城した鉢形城跡の中に田山花袋碑が設置されていたのは埼玉県中心に活躍されていたからだということを知りました。

水明発展基金御礼(敬称略)

— 令和六年九月三十日現在 —

|         |    |   |           |   |   |
|---------|----|---|-----------|---|---|
| 鈴木貴水    | 10 | 口 | 大塚茂子      | 1 | 口 |
| 阿部幸代    | 1  | 口 | 丸山マスマ     | 2 | 口 |
| 加藤イツ子   | 10 | 口 | 石山かつ子     | 2 | 口 |
| 大塚茂子    | 10 | 口 | 清水桂子      | 1 | 口 |
| りんどう忌より |    |   | 大村節代      | 2 | 口 |
| 染谷風子    | 1  | 口 | 小林京子      | 2 | 口 |
| 梅澤輝翠    | 2  | 口 | 野田静香      | 2 | 口 |
| 西幅公子    | 2  | 口 | 森川義子      | 2 | 口 |
| 皆川更穂    | 1  | 口 | 梅澤佐江      | 3 | 口 |
| 保坂翔太    | 1  | 口 | 宮崎チアキ     | 2 | 口 |
| 日高道を    | 1  | 口 | 森下美智枝     | 3 | 口 |
| 河野はるみ   | 2  | 口 | 反町 修      | 2 | 口 |
| 越田栄子    | 1  | 口 | 本橋稀香      | 1 | 口 |
| 田中章嘉    | 1  | 口 | 熊倉千重子     | 2 | 口 |
| 石井喜恵    | 2  | 口 | 秋谷風舎      | 3 | 口 |
|         |    |   | — 合計75口 — |   |   |

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

月刊 俳句界 2024年 12月号

特集

たくさんのいのり  
俳句に祈りはどう詠まれてきたのか

○日本人にとって「祈り」とは何か

小林宣彦 (國學院大學)

○「祈り」が込められていると感じる句

若林哲哉

○私の「祈り」緒方敬 藤本美和子

小川軽舟 林桂 飯田晴

ステイヴン・H・ギル

篠崎央子 荒井千佐代 石黒英進

特集 漢詩の世界

●漢詩の魅力を語る

円満字二郎 小津夜景 日原傳

董振華 塚越義幸

●漢俳とは何か 竹田憲生

〈ラビラ〉 俳句界NOW 塩見恵介

【注目の句集】

斎藤信義 『光る雪』

中村姫路 『暦日』

充実の  
連載陣  
宮坂静生 青木亮人 井上泰至 坂口昌弘  
田島健一 甲斐睦朗 松本葉夏

「俳句界」投稿欄 一流選者11名!  
日本一充実の投句欄



※一部変更の可能性あります。

株式会社 文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 後記

十一月・十二月合併号をお届けします。定期刊行の水明誌で初めての合併号です。これに併い十月号に発表の夏季競詠は本号に移り、水明競詠となりました。

夏季競詠の時は、水明集の方は水明の投句がなかったのですが、合併号からは投句が必要になりました。従って、水明集の方は「水明集」「水明競詠」「山紫集」さらに「鼓笛集」に当たった方はそれぞれとなると大変です。という声も聞こえます。しかし、水明集の方は合併号に投句をすると、水明集の投句が昨年と同じく年間十一回となります。ただ季音の方は十二回が十一回となりますが……。

今月号では、かな女賞のお二人について主宰からの説明の文を載せました。主宰の受賞を知らせるお電話に、田寺玲子氏、由良ゆら女氏はとても喜ばれたとの事です。その後、田寺氏から大会の出席を

楽しみにしていますとお電話を頂きましたが、緊急のご入院でかないませんでした。

◎連日の猛暑の中の夏行、皆様お元気で勉強うらやましく存じます。いつもお世話になり有難うございます。

自選五十句を送らせていただき  
ます。  
七月三十日

というお手紙を添えて五十句を送って頂きました。その後、書いて頂きたい方をお聞きしたり、何度かお電話でお話しました。ところが、大橋廸代氏からの田寺玲子氏の突然の訃報にただ呆然自失でした。本号を楽しみにしていた玲子さん、間に合わず残念です。

玲子氏は今年の全国大会には行けなくて残念だったけれど養生して、来年の九十五周年にはきっと何うからと、お電話で何度もおっしゃっていました。

皆様も、ますますお体をおいといなさって、九十五周年の全国大会にはお元気にご出席を（節代）

今月のはてな？

- 芹生時（せりしょうとうげ）
- 黒鳳蝶（くろあげは）
- 牌楼（はいろう）
- 髷（たぼ）
- 搗（か）ち割（わ）り
- 庶幾（こいねが）う
- 梵刹（ぼんざつ・ぼんせつ）
- 寂靜（じやくじょう）
- 蝻（さ）さぬ
- 総華督（そうかどく）
- 抛（ほう）つて

97 91 89 84 65 61 45 44 24 20 11 頁

## 水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

# 水明

令和六年十一月・十二月号

通巻一一三〇号

令和六年十一月十五日発行

## 発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区腰町四一〇二二

電話 048-822-4741

## ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

## 発行人

山本 鬼之介

## 印刷所

中央 美 版











山紫集

三月号 十二月二十五日締切

氏名(併号)

三月の兼題

「冬 暖」(傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|--|

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

連絡先(電話番号)

氏名(本名)

年齢

歳



# 水明競詠抄 I

山本鬼之介

再会を約す霧笛の「移情閣」  
朝顔や白む札所に巡礼歌  
秋宵や夜会の鬘をあれこれと  
新涼やびたりと決まる帯の位置  
一粒の真珠のピアス涼新た  
萩の風ひとむら越しの遠会積  
仮の世へ命を燃やす牽牛花  
朝顔に江戸の風立つ佃島  
涼新た朝風旨きハイヒール  
新涼や搗ち割り添ふる活け造り  
芋煮椀 主家貫禄の会津塗  
新涼や薪割り斧がひかり出す  
老松に庭師の矜持秋涼し  
新涼や帯に根付けの福小槌  
朝顔や昼間と違ふ夜の顔  
ひらかんと紫紺するどし牽牛花  
碁会所に老くる新顔秋涼し  
襟足をなぶる解れ毛涼新た

大橋迪代  
菅原卓郎  
網野月を  
大場順子  
梅澤佐江  
寺町知子  
大村節代  
五明 昇  
丸山マシミ  
鳥羽和風  
境 延昭  
松井由紀子  
日高道を  
新 曆文  
青木鶴城  
森川義子  
正木萬蝶  
曲淵徹雄



# 水明競詠抄Ⅱ

山本鬼之介

朝顔や助六偲ぶ花川戸  
行く秋や会へぬ人への一行詩  
筆文字の夢二の手紙秋涼し  
新涼や解れ毛揺るる石畳  
二十番線都会の駅の虫時雨  
ガウディの教会未だ秋深し  
朝顔の気まま気ままの蔓の先  
再会に力の握手秋の雲  
新涼の夕日染めゆく水平線  
朝顔に始まる日々や路地住まひ  
朝顔や小さき茶房の蓄音器  
丁寧には交はず会釈や涼新た  
新涼や肩に掛け見る妣の帯  
朝顔に覗かれてゐる朝の顔  
涼新た背筋ぴーんとヨガポーズ  
学童の乗り合ふ渡し涼新た  
新涼の茶葉の焙煎五軒先  
五歳児が画紙一ぱいに牽牛花

染谷風子  
越田栄子  
檜鼻ことは  
河野はるみ  
梅澤輝翠  
小林京子  
清水桂子  
星野和葉  
石井喜恵  
高島寛治  
石山かつ子  
森本早苗  
菊池ひろこ  
島津初花  
菅原真理  
近藤徹平  
岡田宣子  
池田珪子



## 季音抄

山本鬼之介

月代の石段見ゆる連子窓  
然りげ無く風を馳走の秋扇  
遺訓めく墨書の一字秋扇  
あるかなしやの女ごころに灯る月  
新涼や柏手響く村の朝  
蕎麦の花盛る里曲の夕あかり  
黍あらし島津突破の関ヶ原  
木偶人形に命吹き込む西鶴忌  
影武者かたまごふ闇夜の菊人形  
胸に霧抱き浜辺を歩く女かな  
一湾の良夜さえぎるものな  
夕間暮蜜の色濃き蕎麦の花  
お局を偲び小江戸を秋日傘  
手のひらで風押し返す風の盆  
絵の具溶く水しなやかに昼の虫  
村一つ沈むばかりに糸瓜垂れ  
落暉背に女一人の秋遍路  
廃村を丸ごと隠す濃霧かな

菊池ひろこ  
五明昇  
境延昭  
椎野美代子  
島津初花  
鈴木康世  
近藤徹平  
梅澤佐江  
大場順子  
山田美佐尾  
森川義子  
正木萬蝶  
曲淵徹雄  
河野はるみ  
野田静香  
横山君夫  
染谷風子  
洪谷さいち

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水 明 抄

山本鬼之介

桐一葉はらりと落ちて嘘をつく  
 桐一葉坂ゆるやかに母の墓  
 蹲踞をこぼるる水や処暑の夕  
 仏頭の割れ目に生ゆる夏の草  
 日南へサンフラワ―の夏海路  
 星まつり願ひ事なき百寿かな  
 おしろいや路地の仕立屋灯が点る  
 盆波に椰子の実乗りて来たりけり  
 拙宅はこの路地奥よ半夏生  
 太陽と同じ色して大南瓜  
 シエフの前菜枝豆のムースかな  
 山門をくぐる秋風伎芸天  
 島唄や残る暑さを忍ぶ椽  
 初秋や岬の先に光る海  
 閑かさや蟬時雨きく屋敷林  
 下駄の音も胡弓もかなし風の盆  
 局長の祝辞かき消す蟬時雨  
 浜に寄せくる波のささやき初秋かな

篠崎紀子  
 霜多光代  
 菅原卓郎  
 池田珪子  
 清水桂子  
 新 曆文  
 岡田宣子  
 反町 修  
 寺町知子  
 菅原真理  
 小林京子  
 阿部幸代  
 丸屋詠子  
 皆川更穂  
 加藤でん治  
 森下山菜  
 千坂平通  
 山岸久美子

| 水明例会案内 | 句会名  | 日 時       | 会 場                      | 指 導 者 | 幹 事             |
|--------|------|-----------|--------------------------|-------|-----------------|
|        | 第一例会 | 第1日曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 茂小 木和京子<br>林 京子 |
|        | 第二例会 | 第3金曜・午後1時 | 本所ビッグシップ                 | 網野月を  | 山青 中みどり<br>木 鶴城 |
|        | 第三例会 | 第1月曜・午後1時 | 京橋区民会館                   | 山本鬼之介 | 五明 昇雄<br>曲 淵 徹  |
|        | 第四例会 | 第1木曜・午後1時 | 浦和コミュニティ(セ)<br>(パルコ・10F) | 山本鬼之介 | 石井 喜恵修<br>反 町   |
|        | 第五例会 | 第3火曜・午後1時 | 水明発行所                    | 山本鬼之介 | 梅澤 佐江<br>河野 はるみ |
|        | 若松例会 | 第1土曜・午後1時 | 京橋区民館                    | 山本鬼之介 | 正木 萬蝶<br>石 田 慶子 |
|        | 関西例会 | 第3日曜・午後1時 | 守口市文化(セ)                 | 大橋 勉代 | 森本 早苗           |

水 明

令和六年十一月十五日発行 毎月一日発行

(第九十七卷 第十一号)

定価 二〇〇〇円